
久遠の神話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久遠の神話

【NZコード】

N2979V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

十三人の剣士達。生き残る一人だけが願いを適えられる。

この戦いを動かしているのは誰か、そして何故剣士達は戦う運命にあるのか。現代を舞台としたバトルファンタジーです。

第零話 炎の覚醒その一

久遠の神話 第零話 炎の覚醒

ごくありきたりのリビング。木の床のその部屋のやはり木のテーブルに座つてだ。彼は今はトーストを食べている。

彼の後ろの台所ではエプロンを着た四十代の女がだ。黒いフライパンで何かを焼いている。そうしながらだ。彼に尋ねてきた。

「ねえ」

「何だよ」

「あんたベーコンエッグ食べるわよね」

こう彼に問うたのだ。細長めの顔に垂れた奥一重の目、眉は黒く一文字でそれぞれ斜め上にあがつている。唇はしつかりと横にあり鼻は高めでいい形をしている。髪は耳が隠れるまで伸ばし黒い。その彼がだ。

トーストを食べながらだ。こうその女に言つのだつた。

「ああ、今焼いてるんだよな」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。女も彼に答える。

「まずはお父さんをね」

「ああ、親父のなんだ」

「お父さんはハムエッグが好きだから」

見ればだ。実際にフライパンにあるのはハムエッグだつた。白身と黄色い卵の部分に赤いハムの色もある。そこから美味そつな匂いもあがつていて。

「それでまずはね」

「親父のなんだ」

「次にあんたよ」

「彼だといつのだ。」

「あんたの次はね」

「あいつだよな」

「和歌子は起きたの？」

「起きたんじゃないの？」

「彼の返答は実に素つ氣無いものだった。」

「そろそろ朝練の時間だしね」

「ちょっと見てきてくれる？」

母は焼いたハムエッグを皿に移しながら彼に向つ。

「今からね」

「えつ、何でだよ」

「遅刻したら駄目じゃない」

それでだとだ。彼に言つのだ。

「部活つていつてもね。だから起こしてきて」

「あいつが勝手に起きるだろ」

不機嫌になつた声でだ。彼はトーストを食べながら母に向葉を返す。

「そんなの別にさ」

「嫌なら別にいいわよ」

彼の返答にだ。母はこう返すのだった。

「その代わりね」

「ベーコンエッグなしだつてこうんだよな」

「普通の田玉焼きになるわよ」

つまりだ。ベーコンを入れないとこうのだ。ベーコンを入れないと何になるか、何の変哲もない田玉焼きになつてしまつ。見事な恫喝であった。

「それでもいいのね」

「田玉焼きになるのかよ

「それでどうするの？」

「どう問い合わせるの？」

「どっちがいいの？」

「ベーコンエッグに決まってるだろ」

彼の返答はこれだった。

「田玉焼きとベーコンエッグじゃな

「全然違うわよね

「わかつたよ。今起こすよ」

彼は嫌々といった顔でだ。携帯を胸のポケットから出してだ。

そのうえでだ。メールを入れたのだった。

それを済ませてからだ。母に言つた。

「起こしたぜ」

「あんたねえ

「携帯でもいいだろ」

「こうだ母に話すのだった。

「そのアラームの音で起きるんだからな

「それはそうだけれど」

「じゃあいいよな」

「まあね。それじゃあいいわ

憮然としているがそれでもだ。母は妥協した。

その印にだ。ベーコンを数枚出した。そしてだ。

そのベーコンをフライパンに出してだ。焼きはじめた。それを焼いて卵も一つ落としてだ。それでだつた。

彼にだ。こう言つのだった。

「はい、できたわよ

「じゃあ食うか

「全く。何でそう横着なのよ

ベーコンエッグを皿の上に置きながらだつた。我が子に言ひ。

第零話 炎の覚醒その一

「あんたって昔から」

「無駄な力口リーは使わないんだよ」

「それを横着つていうのよ」

そんな話をしながら彼の前に皿を持って来た。黄色い氣味のベーコンエッグが実によく焼けている。しかも美味そうな匂いも出している。

それをしてだ。また言つ母だつた。

「大学生になつてもそれは変わらないのね」

「部活じや速さの中田つて言われてるさ」

だからいいとだ。そうした口調だつた。

「部活で動いてるからいいんだよ」

「そういう問題じやなくてね」

また言つ母だつた。言ひながら台所に戻つてだ。またフライパンを使つていた。

そうしながらだ。母は彼に言つのだつた。

「いつした場合は動くものでしょ」

「わざわざあこいつの部屋まで行つてかよ」

「ええ、そうよ」

「いいじゃないか、別にな」

またこう言う彼だつた。

「起こしたんだからな」

「これで起きなかつたらどうするのよ」

「またメール送るぞ」

そうするとだ。中田はあつさつと答えた。

「それだけさ」

「本当に直行らしくわね」

母は彼の名前を呆れた声で言つた。

「そういうところ誰に似たのかしり」

「多分爺ちゃんだな」

「お父さん?」

母から見ればそうなる。それだからこそその言葉だった。

「お父さんに似たの」

「そりなんだろうな」

「そりいえばお父さんって横着だけれど」

「だから俺は爺ちゃん似なんだよ。顔もね」

「そうね。顔はそつくりね」

母もそのことは認めた。

「それに剣道をやつてるのもね」

「爺ちゃんに教えてもらつたからな」

「お父さんも変なこと教えたわね。けれどね

「けれど? 何だよ

「お父さんそこまで横着じゃないわよ」

それは違うといつてのだ。

「流石にね」

「じゃあうちの親父は」

「お父さんは丁寧でしょ」

今度は夫をいつ言つてのだった。彼女にとつて父は一人いるのだ。

「それも凄くね」

「そういうえばそつか」

「だから。あんたは横着過ぎるのよ」

こう言つて我が子を叱る。またベーコンエッグを焼きながら。彼はその間にフォークとナイフを使って自分のベーコンエッグを食べている。

「本当にね」

「横着上等だよ」

「開き直つたわね」

「だから無駄な力口リーは使わないんだよ」

「剣道でもそういうの？」

「そつちは速さの中田だよ」

また自分の仇名を言つてみせたのだった。

「そつなんだよ」

「そつちは力口リー使つてゐるのね」

「そつじやないと勝てないからな」

「必要だから使うのね」

「そういうことだよ」

言いながらコップの中の赤い野菜ジュースを飲む。

「必要な時は使うからいいんだよ」

「それで生きていくのね」

「ずっとな」

「適當ね」

「適當か？」

「そういうのを適當つていうのよ」

我が子にだ。半ば叱る様にして次げるのだった。

第零話 炎の覚醒その三

「全く。まあいいわ
「あいつが起きればそれでいいよな」
「美和子がね」
「そのだ。彼女がだといつのだ。
「本当にそろそろよね」
「起きなければまた携帯でメールを送る」
「そうしてね」
「ああ、そうするわ」
そんな話をしながらだった。中田はジュースを飲みベーコンエッグを食べていた。そこにだ。
中田によく似ただ。中年の男性が来たのだった。白いカッターに黒と青のストライプのネクタイに黒のスラックスという格好である。その彼がだ。中田の顔を見て「ひづいた。
「何だ、御前だけか
「あいつはもうすぐ起きてくるさ」
「そうか。美和子ももうすぐだな」
「そうなら俺も何もしなくていいしな」
「全く。御前はなあ」
中田に対してだ。その中年の男は呆れる様に話すのだった。
「昔からだよな」
「いいじゃないか。別に誰も困つてないだろ?」「さつきもその話したのよ」
母がだ。男に言つてきた。
「適当つてね」
「ものぐさのはよくないぞ」
「ううう。まあ今言つたから
「ならないか」

「またね。それじゃあ今から
「ああ、今朝は何なんだい？」

「ハムエッグよ」

それだとだ。母は彼に話す。

「お父さんの好きなね

「おつ、いいな」

ハムエッグと聞いてだ。彼、即ち中田の父は笑顔になつて言つた。

「じゃあそれ食べて元気をつけて行くか

「そうしてね。今日も頑張つてね」

「母さんもだよな」

「ええ。スーパーのパートね」

所謂共働きだ。パートでもそつ言つてい。

それにだ。母も行くというのだ。

「頑張つて来るから」

「無理はしないようにな

「お父さんもよ。課長になつたんだから」

「いやあ、中間管理職は大変だよ」

苦笑いしながらだ。サラリーマンに相応しいことを話す。

「何かつていうと頼りにされてな

「仕事が回つてくるのね」

「残業も多いしなあ

「そうよね。だからね

「無理はするな、つてな

「過労にはね

「働き過ぎて疲れたら何にもならないからな

「こうも言つ父だった。

「だからな

「そうよ。気をつけてね

「じゃあまずは」

その為にだといってだった。

彼はだ。そのハムエッグを食べる。そしてだった。
野菜ジュースも飲む。そうしながら妻に話した。

「朝から一家団欒といきたいんだがな」

「最後の一人が今に来るさ」

中田は明るく笑つて話した。

「今すぐにさ」

「だといいんだがな」

「まあ美和子はねえ」

ここで母がまたベーコンエッグを皿の上に置いてから話す。

「朝が弱いから」

「低血圧だからな」

「そうそう、それよ」

母は息子の言葉に応えた。そのうえでの言葉だった。

第零話 炎の覚醒その四

「お母さんによ似てね
「お袋もそうだったのか」
「やうよ。低血圧なのよ」
血圧申告にてみる言葉である。
「これでもね」
「けれど母さん毎朝ひやごと起きているじゃないか」
「努力してるのよ」
それでだとこうのだ。
「それでなのよ」
「努力だったのか」
「そうよ。朝は気合よ」
母はここにこいつしたこと夫と息子に話した。
「起床ラッパで起きると同じじよ」
「それじゃあ海軍だよな」
中田は母の今の言葉に首を捻つて述べた。
「帝国海軍だよな」
「今の海上自衛隊もそうよ」
「ラッパで起きるのかよ」
「そうよ、それは今も同じよ」
「ラッパだなあ」
「そう、ラッパでね」
起きるのが海上自衛隊だといつのだ。
「それは陸自さんや空自さんも同じだから」
「何処もラッパか、自衛隊は」
「そうよ」
まさにその通りだと心える母だった。
「それが自衛隊なのよ」

「ラッパつてまだ使つてたんだな

「使わないと思つてたの？」

「今は放送とかあるだろうにな

「これが中田の意見だつた。

「それでも違うんだな」

「違うわよ。とにかくね

「とにかく？」

「美和子は？」

妹の話がだ。また出て來た。

「まだ起きないの？」

「いい加減またメール送るか」

面倒臭そうな顔でだ。中田はまた携帯を出した。
それからだ。メールを送りうつとする。しかしだ。

ここでだ。セミロングのあちこちに癖のある黒髪にだ。縦に大きく切れ長めになっている目に白のブラウスと黒いミニスカートにハイソックスのだ。少女が來た。小柄でだ。体型もまだ幼い感じである。

その少女が來てだ。中田達に話すのだつた。

「おはよう」

「やつと起きたわね」

母がだ。その少女にやれやれといつた口調で話した。

「全く。毎朝遅いわね」

「低血圧なのよ」

こう返す少女だつた。その癖の強い髪を手で触りながら。

「それでなのよ」

「毎朝そう言つわね」

「だつて本当のことだから」

「全く。早く御飯食べなさい」

母は少女にまた言った。

「用意できるから」

「朝御飯何なの？」

「トーストとベーコンエッグよ」

実際に皿の上にあるその一つを少女の前に出してだ。そのうえで言つのであった。

「はい、これ」

「有り難う、お母さん」

その少女美和子は笑顔で母の言葉に応えた。

そのうえでだ。まずはトーストと手に取つて千切つて口の中に入れてだ。それを食べながら中田に顔を向けて話をするのだった。

「さっきのメールお兄ちゃんよね」

「俺の他に誰かいるか？」

「残念だけれどいないわ」

トーストを食べながら兄に話す。話す間に野菜ジュースをコップの中に入れている。

「あんなメール送るのはね」

「だろ？すぐにわかつただろ」

「起きろって一言だつたから」

それでだ。わかつたというのだ。

第零話 炎の覚醒その五

「何かね。お兄ちゃんつていつもね
「いい加減だつていのうのか?」
「つていうか本当に無駄なカロリー使おうとしないわね
「こやつて時の為に節約してんだよ
妹に対してもだ。言葉は同じだつた。
「そうしてるんだよ」
「そうじりのを世間ではね
「ものぐせつていうんだな
「そうよ。まさにそれよ」
トーストを食べ続けながら話す。
「それ以外の何者でもないじゃない」
「何か俺いつもそう言われるな」
「言つわよ。実際にそうだから
それでだというのだ。
「まあ起こしてくれたのはね
「感謝しろよ
「有り難う」
御礼自体はあつさりと述べた。そうしてだつた。
トーストの次はベーコンエッグを食べてだ。彼女は言つた。
「とにかく。これ食べて歯を磨いてね
「それで顔を洗つてだな
「シャンプーもしてよ」
父に応えて話す。
「それから学校に行くわ
「色々とやることがあるんだな
「女の子はそうなのよ
「パパ父にも話すのだった。

「それで朝の部活の後でね

「御化粧もよね」

「それもしないといけないから」

「今度は母に応えての言葉だ。」

「本当に色々としないとね」

「朝練の後でシャワーを浴びたらどうだ?」

「兄が妹にこんなことを提案した。」

「それならすつきりするだろ」「うん

「それも悪くないけれど」

「だがだ。それでもだといふのだ。

「そこまではね」

「しないのか

「夕方の部活の後はすぐに帰つてお風呂だし」

「これが美和子の日課だ。風呂も毎日なのだ。」

「朝はシャンプーだけで充分よ」

「家でやるそれだけか

「朝練はそんなに汗かかないし」

「そうした事情故にだ。部活の前のシャンプーだけで充分だといふのだ。

「だからね

「俺はまあ。あれだけれどな」

「御風呂は一日を終えてよね」

「ああ、それだよ」

「中田の風呂はそうしたものだった。」

「やっぱりそれがいいだろ」

「まあ私はそれだとね」

「気持ち悪いか?」

「だからなのよ」

「朝起きたらね」

「それでだとだ。美和子は話すのだった。」

「朝起きたらね」

「シャンプーなんだな」

「朝からシャンプーの匂いをせでる女の子つていいじゃない
いいか?」

「清潔な感じでね」

自分で言う美和子だった。

「いい感じじゃない」

「そうか?俺は別にな」

「そういう鈍感なのが駄目なのよ」

今度は田を怒らせて言う美和子だった。

「全くね。そんなのだからね」

「何だつてんだよ」

「彼女できないのよ」

少し意地の悪い笑顔になつての兄への言葉だった。

第零話 炎の覚醒その六

「「」のままずっと彼女いないで通すの?」
「そんな奴いるかよ」
「ゲイの人だつたらそうでしょ」
「俺はゲイじゃないからな」
そのことはムキになつて否定する。
「俺だつてちゃんと募集してるわ」
「募集してるだけじゃないの?」
「今度はそう言うのかよ」
「だつて。実際に彼女いないじゃない」
この現実をあくまで冷酷に話す美和子だった。
「そうでしょ」
「そのうちわかるわ」
「そのうちかよ」
「そうだ、そのうちだよ」
こう妹に返すのである。
「だから大丈夫なんだよ」
「だといいけれどね。それはそつとよ」
「今度は何だよ」
「お兄ちゃん旅行行かないのよね」
美和子は話を変えた。そこにだ。
「そうよね」
「ああ、残念だけれどな」
そうだとだ。彼はまたとーストを食べながらそつだと話す。
「合宿だからな」
「大学の部活つて多くない?」
「そんなに多いか?」
「「」の前あつたばかりじゃない」

「それだ。部活の合宿がだといふのだ。

「それでまたつて」

「大会が近いからな」

「それでだとだ。中田はトーストにマーガリンを塗りながら話す。

「それでだよ」

「大会ね」

「ああ、今年こそはつてなつてるからな^西」

「八条大学の剣道部つて強いからね」

「ああ、余計にな」

「だからよね。成程ね」

「それを聞いてだ。頷く彼女だった。

その話をしてだつた。父と母も息子に話した。

「なら留守番頼むな」

「御願いね」

「犬の散歩と猫の餌御願いね」

「しつかりしてくれよ」

「わかつてゐるさ。あいつ等のことは任せてくれよ
ペツト達のことはあつさりと受けるのだた。

「それじやあ楽しくな」

「金沢だからな。土産は期待しておけよ」

「お魚たつぱりだからね」

「それはいいな」

「魚と聞いてだ。彼もだ。

笑顔になつてだ。こう両親に言ひ。

「北陸つて魚が美味しいからな」

「だからな。楽しみにしておけよ」

「是非共ね」

「それじやあ。楽しくやつてきててくれよ

笑顔で話してだつた。彼は学校に向かうのだつた。

バイクで大学まで行き講義を受けてから部活に入る。まずは黒い

ジャージを着て走った。それが終わってから同じ部の仲間達といふことを話すのだった。

「なあ、聞いたなんだけれどな

「何だ？」

「どうしたんだよ急に

「何かフェシング部に凄い奴がいるって聞いたなんだけれどな

こう仲間達に尋ねるのだった。

「何ていったかな

「ああ、牧村か

「あいつのことか

すぐにだ。この名前が出て來た。

第零話 炎の覚醒その七

「一年のだろ? 学部は知らないけれどな
「あいつのことだよな」
「そうだよな」
「ああ、牧村つていうんだな」
話を聞いてだ。中田は納得した顔になつた。ランニングの後の整理体操をしながらだ。仲間達の話を聞いてそれで頷くのだった。
「そういうんだな」
「強いけれど相当無愛想な奴らしいな」
「口調が全然変わらないらしいな」
「そんな奴か」
「学部は。ええと」
「何処だつた?」
学部の話になるがそれはだつた。彼等の記憶にはなかつた。
「まあ。わからないけれどな」
「とにかくそういう奴だよ」
「強いけれど無愛想でな」
「付き合いにくい奴みたいだな」
「世の中色々な奴がいるからな」
中田はこう言うだけだつた。
「無愛想な奴もいるよな」
「で、そいつ酒飲めないらしいしな」
「甘党らしいぜ」
「それもかなりな」
「ああ、俺も甘いもの好きだぜ」
中田は甘いものの話を聞いてだ。笑いながらこいつ話した。
「アイスでもチョコでもな。何だつてな」
「御前それに酒も飲むしな」

「ビールでもワインでも飲むよな」

「アルコールが強い酒は駄目だけれどな」

それでもだ。飲むことは飲むと「いうのだ。

「けれど好きだぜ」

「結局甘いものも酒もいけるんだな」

「御前はそうだよな」

「ああ、ただ付き合つのは女だけだぜ」

陽気なままこうしたことも言つ彼だった。

「男は駄目だからな」

「そつちは両方じゃないよな」

「まあ。流石にな」

「それが普通だよな」

「俺はホモは駄目なんだよ」

「そうだと話す彼だった。た。

「ああいうのはどうしてもな」

「我が国はそういうのは寛容だけれどな

「歴史上結構そういう人も多いしな」

「織田信長とか武田信玄とかな」

「上杉謙信もそうだよな」

彼等にそうした趣味があつたのは判明している。織田信長が森蘭丸を傍に置いていたのも武田信玄が高坂昌信を傍に置いていたのもそれが理由だ。上杉謙信も直江兼続を育てたのもそつした理由もあつたのだ。

「俺はそつちの趣味ないけれどな

「俺も」

「俺もだよ」

「そういうのはな」

「こう口々に話す彼等だった。

「俺達も酒も甘いものもいけるけれどな

「付き合うなら女の子だよなあ

「今度コンパあるよな」

「中田、御前もそれ出るよな」

「今度のコンパ」

「ああ、確かあれだろ」

中田もだ。コンパと聞いてだ。これまで以上に明るい笑顔になつて仲間達に応えるのだった。そつしてそのうえでこうしたことと言つた。

「アーチェリー部とのだよな」

「ああ、それだよ」

「アーチェリー部の娘達とな

「スター・プラチナで合コンだよ

「絶対に来るだろ」

「俺のライフワークだからな」

笑顔のままだ。こんなことも言つた。中田だった。

第零話 炎の覚醒その八

「コンパに参加して遊ぶのはな」「ああ、じゃあ行くか」「御前の名前書いておくからな」「それじゃあな」「さて、どんな娘がいるかな」明るい顔のまま話す彼だった。「今から楽しみだぜ」「おい、休憩終わりだ」部長が彼等に言つてきた。「今度は筋トレやるぞ」「わかりました」「じゃあ次はそれですね」「ああ、それするぞ」「こう彼等に話すのである。やたら背の高い茶髪の青年だ。青いジヤージを着ていてそれがかなり似合つている。その彼が部長だった。「身体はほぐしたよな」「はい、休めました」「充分過ぎる位に」「それならやるぞ。いいな」「こうしてだつた。彼等は今日はそのままトレーニングを続けるのだつた。

そしてその後でだ。彼等はだ。
合コンの日を迎えた。その日にカラオケ屋に入った。その店に入るとだ。

まずは星達が田に入つた。そしてその次にはだ。
横浜ベイスターズの帽子を被つた小柄な娘がカウンターに見える。黒のショートヘアの可愛い娘だ。しかしその表情はとじうど。

「ああ、ベイスターズ負けたか」

「うわ、今日も酷い点数だな」

彼等はカウンターの壁のそのスコアボードを見て言つ。

「こつちは完封で向こつは一桁か」

「凄い惨敗だな」

「よくここまで負けるよ」

「全くだな」

「こつだ。彼等は呆れながら言つのであった。

「広島相手に何処まで負けてるんだよ」

「今鯉が勝つたら阪神抜かされるよな」

「せめて。ここで勝つてくれないとな」

「困るんだけどな」

「全く。ベイスターズもなあ」

「こんなのじやな」

「今年も最下位か?」

不吉な、横浜ファンにとってはそうした言葉が出て來た。

「ここんところずっと最下位だからな」

「しかも負け方酷いしな」

「いい選手はどんどん出て行くからな」

「フロントは駄目だしな」

「もうどうしようもないだろ」

「暫くずっと最下位か?」

こんなことを話しているとだった。カウンターのその娘は。

無言だがそれでもだ。彼等をむつとした顔で見据えた。そうして

だ。

彼等にだ。その不機嫌な声で問うのだった。

「あの」

「ああ、何だ?」

「どうしたんだ?」

「御部屋はどうぞされますか?」

「こう彼等に尋ねるのである。

「それで」

「ああ、そういうえば部屋何処だった?」

「予約入れてたよな」

「そうだつたよな」

「予約ですか」

その不機嫌な顔で応えるカウンターの娘だった。

「今日の予約は五号室ですが」

「そうそう、そこそこ」

「五号室だよ」

「そこだつたよ」

「わかりました」

声もだ。実に不機嫌なままだ。そしてだ。

彼等をその五号室に案内する。そこはパーティができるだけ広かつた。

まだ灯りは点いておらず暗い部屋にだ。壁に付けられている席がありテレビもある。そしてマイクに分厚い曲の番号が書かれた本、そつしたもののが置かれていた。

第零話 炎の覚醒その九

その部屋に案内してだ。女の子は彼等に会つて來た。

「それじゃあ」

「ああ、後で女の子も來るからさ」

「その娘達も案内してくれよ」

「頼んだからな」

「わかりました」

やはりだ。不機嫌な返答だった。

「それでメニューは」

「ああ、じゃあこれにするか？」

一人がだ。壁にあるその貼り紙を見て言つた。そこには「一百円でだ。お楽しみメニューと書かれている。その貼り紙を見ての言葉だつた。

「これにな」

「ああ、それ止めておけ」

「絶対にな」

ところがだ。周囲はだ。その彼にこいつの言つた。

「そのメニュー横浜が負けると酷いからな」

「もう頼んだ酒に絶対に合つてない料理が出て来るんだよ」

「カレーに日本酒とかな」

「えげつないからな」

「狙つてはいません」

それは否定する女の子だった。

「安心して下さい」

「いや、それでも最悪の組み合わせになるだろ」

「ましてや今日横浜負けてるから」

「それじゃあな」

「絶対にそうなるだろ」

「今日も」

「そうかも知れません」

しかもだ。否定しないのだった。彼等のその言葉を。

「ですが味は手抜きしません」

「いや、それでも酒と野菜ステイックとかはな」

「絶対に勘弁して欲しいから」

「だから他のもの頼むよ」

「何があつてもな」

「そうですか」

そう言われてだ。女の子はだ。その話を終わらせてあらためてメニューを聞いてオーダーに書いてだ。それからこう彼等に話した。

「それでは。後でなのですね」

「ああ、後でな」

「女の子達が来るからさ」

「安心してくれよ」

「わかりました」

小さく頷いて応える女の子だった。そのうえでその場を後にするのだった。

そうしてだ。帰るのだった。それを見届けてからだ。

彼等はそれぞれの席に座る。その中で中田は言つのだった。

「もうすぐだよな」

「ああ、女の子達だよな」

「そうだよ」

こう友人にも返す。

「それと酒に食い物な」

「食い物はともかく飲み放題歌い放題だからな」

「たっぷり楽しめるぜ」

「そりやいいな。じゃあ心一杯飲むか

笑顔でだ。中田は言った。

「これからな」

「それで女の子だけれどな」

一人がその相手のことを話してきた。

「一人面白い娘がいるらしいな」

「面白い?」

「ああ、留学生らしいんだよ」

その娘がだ。面白いというのである。

「髪の毛の色とかそんなのが凄いらしいんだよ」

「可愛いのかよ」

「可愛いっていうか美人らしいな」

「それもかなりな」

「へえ、美人か」

その話を聞いてだ。中田はすぐに笑顔になつた。そのうえでだ。女の子達が来るのを待つた。そして程なくしてだつた。

「お待たせ」

「元気にしてる?」

「どうなの?」

女の子達の明るい声が部屋に入つて來た。見ればだ。

第零話 炎の覚醒その十

派手で露出の多い、所謂勝負服を着てアクセサリーも身に着けた女子の子達がやつて来てだ。そのうえで中田に対しても声をかけてきた。その彼等にだ。中田の仲間達が笑顔で応える。

「今来たところだよ」

「丁度今な」

「あのベイスターズの帽子の女子に案内されたんだよな」

「そう、明日夢ちゃんにね」

「この部屋つて言われてね」

「すつ“ぐ無愛想にね」

「この言葉も付け加えられる。

「いつもつていうか横浜が勝つてたらね」

「凄く愛想いいんだけれどね」

「けれど。今日は負けてるから」

「しかも惨敗だから」

「それでだというのである。

「今日は機嫌悪いのよね」

「それもかなりよね」

「まあ。いつもだけれどね」

「横浜が負けるのはしょっちゅうだから」

「何だ。知り合いなんだ」

剣道部員の一人がここでこう彼女達に言った。相手は彼等の向かい側に座つてきている。そのうえで話を続けるのだった。

「あの娘と

「つていうか明日夢つて名前だったんだな」

「はじめて知ったよな」

「そうだよな」

「いい娘よ」

このことは保障する彼女達だった。

「確かに狂信的な横浜ファンだけれどね」

「それでもいい娘よ」

「明るくて仕事もできるし」

「このお店の娘さんでね」

「つてこの店の娘さんだったのかよ」

「そうだったんだな」

「彼等のはじめて知る真実だつた。

「誰かつて思つてたけれど」

「そういう娘だったのかよ」

「そう、このビルのオーナーさんの家でね」

「スター・プラチナの看板娘なのよ」

「アルバイトとは少し違うから」

「そのことはわかつておいたらいわ」

こう笑顔で話していくのだった。そうした話をしてからだ。あらためてコンパに入る。その場にだ。

銀色の見事な髪を後ろに伸ばし束ねてだ。そうしてである。緑のエメラルドの如き目はやや切れ長で二重である。睫毛が長い。顔立ちはほつそりとしていて鼻立ちが整っている。色は何処までも白い。

長身ですらりとしている。長い足を黄色いスラックスで包んでいる。そのブラウスは薄いレモン色だ。その彼女がだ。中田の前に座っていた。

中田は本能的にだ。彼女に声をかけた。

「あのわ」

「はい」

その銀髪の美女もだ。彼に応えてきた。

「君だよね。その留学生つて」

「私がどうかはわかりませんが」

美女はこう前置きしてから中田の言葉に応えてきた。

「私は確かに留学生です
「やっぱりそうなんだね」
「ギリシアからきました」
「」」」
「」」」
「」」」

「あの国からです」

「ギリシア人なんだ」

「そうです」

中田の言葉にだ。「」くつと頷いての言葉だった。
「国籍はそうなります」
「わかつたよ。それでこの国に来たんだ」
「はい。ただ」
「ただ？」
「父が日本人として」
「それでだというのだ。

第零話 炎の覚醒その十一

「名前は日本の名前になつています」「えつ、名前はそなんだ」「銀月聰美といいます」「こう名乗るのだった。「これが私の名前です」「それで部活は」「はい、アーチェリー部です」「そうだよな。アーチェリーは向こうにいた時から?」「ずっとやっています」このこともだ。美女、即ち銀月聰美は話した。
「長い間」「長い間つて?」「遥かな昔から」不意にだ。聰美はこんなことを中田に話すのだった。「そうしています」「あのさ、遥かな昔つて」中田はすぐにその言い方に突つ込みを入れた。「幾ら何でもさ」「はい?」「ないんじゃないかな」笑つてだ。こう聰美に話すのだった。「だつて俺達大学生だよ」「だからですか」「そんなさ。遙かつて」笑いながら聰美にまた言つ。「大袈裟だよ」「あつ、そなれば」

聰美もふと気付いた顔になつてだ。それで言葉を返してきた。

「私大学生ですから。日本の」

「で、幾つなの？」

「二十になります」

「何だ。俺と同じ歳じゃない」

「ええと。お名前は」

「中田つていうんだ」

笑顔で名乗る彼だった。

「中田直行つていうんだ」

「中田さんですか」

「そう、宜しくね」

「わかりました」

「それで銀月さん」

中田の方から聰美に對して言ひつ。

「あんた趣味とかあるの？」

「趣味ですね」

「やつぱりあれかなアーチェリーかな」

「はい、それと」

「それと？」

「スポーツなら何でもです」

少しおずおずとした調子で中田に話す。
「しています」

「スポーツ大好きなんだ」

「兄も好きですし」

「ああ、お兄さんいるんだ」

「双子の兄です」

兄弟もいるんだ。中田に話す聰美だった。

「ギリシアにいます」

「ふうん、そなんだ」

「兄はスポーツの他に音楽も好きで」

「兄はスポーツの他に音楽も好きで」

「何か凄いね」

「占いもします」

兄のことなのだ。聰美は中田に問われる前に話していく。

「ただ私はスポーツ以外は」

「音楽は駄目なんだ」

「しない訳ではないですが兄程は」

「成程ね。お兄さん凄いんだ」

「かなり」

「ううん、羨ましいなあ」

中田は聰美の話を聞いて心から憧れの言葉を述べた。

「俺つてさ。音楽とかは好きだけれど」

「御自身でやられるのは」

「駄目なんだ。絵は好きだけれどね」

「絵、得意ですか？」

「芸術学部じゃないけれど自信はあるよ」

「今度見せてくれますか？」

「よかつたらね」

『氣さくに返す。彼にしてもまんざらではない。

第零話 炎の覚醒その十一

その彼にだ。聰美はこんなことを言った。

「あの」

「うん、何かな」

「これからです」

「これから？」

「何があつても絶望しませんか？」

いつも彼に問うてきたのである。彼の目の目を見ながら。

「中田さんは。何があつても」

「ああ、絶望ね」

今度も笑いながらだ。そうして返す中田だった。

「俺つてそういうのとはさ」

「縁がないんですね」

「うん、ないんだ」

陽気そのものの声での返事だった。

「全然さ」

「じゃあ何があつても」

「そういうのはないよ」

また答える彼だった。

「何時でも明るくコーモアが俺の信条なんだよ」

「明るくですか」

「くよくよしたって仕方ないじゃない」

「そうですね。本当に」

「だからそれはないから」

こう聰美に話すのである。

「安心してよ」

「わかりました」

「で、銀円さんはどうなの？」

中田は聰美にそのまま話を切り返した。

「絶望したことっていうか。そんなことは」

「気にしていることはあります」

俯いた顔になつてだ。聰美は言つてきた。

「ずっと」

「ずっと?」

「友人のことで」

「そのだ。友人のことでだといつのだ。

「私の姉の様な存在の。友人のことで」

「ふうん、そのお友達のことだ」

「はい、気にしています」

「そうだとだ。中田に話すのである。

「そのことがどうしても」

「友達思いなんだね」

「大切ですか」

「だからだといつのである。

「それで」

「で、その人つて今どうしてるのかな」

中田は自然に聰美に尋ねた。

「日本にいるのかな」

「はい」

聰美は中田の今の問いに小さくこくつと頷いて答えた。

「います」

「そう、この国に」

「ただ」

「ただ?」

「日本の何処にいるのかは」

「それがだ。よくわからぬといつのだ。

「そこまでは」

「?それってやばくない?」

中田は聰美の話、彼女の国籍も踏まえて考えてだ。怪訝な顔で述べた。

「その娘。女の子だよね」

「そうです」「

「女の子で。留学生なのかな」

「そうなります」

「留学生の娘が住所不定つて」

「この町にいるのは間違いないのですが」

聰美はこうも話す。

「八条町ですね」

「うん、八条町だよ」

町の話にもなった。彼等が今いるのはその町なのだ。兵庫県の神戸市にある。そこに八条大学もありだ。そうして通っているのだ。

第零話 炎の覚醒その十三

「で、その人ってこの町にいるんだ」「それはわかつています」「その娘の家は」「部屋はあります」聰美は既に部屋と云ふ言葉も知つてゐるが今の言葉でわかつた。

「そこにいる筈なのですが」「それでもなんだ」「何時行つてもいません」「放浪癖あるんだね」「そうです。簡単に言うと」「厄介だね。っていうかその娘もやつぱりこの学校の生徒さんだよね」

部屋と聞いてだ。中田はいつも考えて問つた。

「そうだよね」「そうです。それも私と同じです」「それで大学に通つてなくて」「するがありますから」

聰美は不意にだ。こんなことも言つた。

「ですから」「することつて?」「そしてだ。中田もだ。こう彼女に問い合わせた。「何それ」「あっ、それは」「どうも訳ありな娘みたいだけれど」「何でもありません」言葉を打ち消した。慌てた動作でだ。

「気にしないで下さい」

「そりなんだ」

「はい、それで」

「それで？」

「中田さんは剣道をやつてますね」

「そりだよ。これでも腕には自信があるからさ」

中田は剣道の話になると明るい笑顔になつて話をはじめた。

「ボディーガードでも何でもできるよ

「そうですか。そこまで」

「これでも負け知らずなんだぜ」

「そうそう、こいつ強いよ

「動きも速いししかも二刀流でさ」

「相当なもんだから」

中田の周りにいる剣道部の面々が酒やピザを手に囁いてきた。無論彼等も剣道部である。

「ただ。性格は軽いからさ」

「そこは注意してくれよ」

「結構いい加減だから」

「おいおい、それはないだろ」

仲間達の言葉に中田は困った顔になつて言ひ返す。

「俺はこう見えても真面目だぜ」

「何処がだよ」

「何処が真面目なんだよ」

彼等は茶化すように笑つてだ。彼に言ひ。

「御前が真面目だつたらそれこそだよ」

「世界中真面目な人間だらけだろ」

「いつも適当だからな」

「何をするにしても」

「俺は必要なこと以外には力を使わないんだよ」

「ここでもこんなことを言う彼だつた。た。

「セーブしてるんだよ、セーブ」

「手抜きはセーブって言わないだろ」

「つたく、何から今まで手を抜くんだからな」

「本当に大事な時以外は手を抜くからな」

「それをいい加減つていうんだよ」

彼等のこうした言葉を聞いてだ。聰美は笑わなかつた。本来ならば笑う、それもくすりとした笑いになるところだがそれでもだ。彼女は笑わなかつた。

真面目な顔で聞いてだ。こう言つのである。

「そうですか。そういう方もまた」

「また？」

「またつて？」

「なるのですね」

聰美的言葉だ。

「そうなのですね」

「なるつて？」

「一体何に？」

「あつ、何でもないです」

まだだ。周りに言われて言葉を打ち消す聰美、だつた。

第零話 炎の覚醒その十四

そして誤魔化す為かだ。彼等に「こんな」とを言つてきた。

「それでお酒ですが」

「ああ、飲み放題だからさ」「中田が笑顔で彼女に答える。

「好きなだけ飲んでいいからさ」「ワインもでしょうか」

その飲み放題にワインもあるかどうかといつのだ。
「それもあるでしょうか」

「ああ、ギリシアじゃ」

「はい、ワインです」

それが主に飲まれるといつのである。実際にギリシアでは昔からワインがよく飲まれている。中田もそれは知つていてそれで呟つた。

「それが一番よく飲れます」

「だからだよな。勿論な」

「ワインもですね」

「好きなだけ飲めるよ

「では。そうさせてもらいます」

「ワイン注文しようぜ」

中田は早速周りに言った。

「それでワインで乾杯しようぜ」「ああ、それじゃあビールだけでなくな

「ワインも頼んでな」

「そうして飲もうか

こうした話をしてだつた。彼等は早速ワインを頼んで飲むのだった。

無論聰美も飲む。その飲む量はかなりのものだった。

中田もワインをボトル単位で飲む彼女にだ。驚きを隠せずに声をかけた。

「飲むねえ」

「好きなので」

「それでそれだけ飲むんだ」

「はい」

その通りだとだ。聰美は答える。

「飲めます」

「そうか。それにしても飲むよな」

「そんなに飲んでますか？」

「あんたボトル三本目だよ」

聰美は自分からグラスに赤いワインを注ぎ込んで飲んでいる。既に一本空になつていて、しかもさらにだ。三本目も空けているのだ。中田もワインを飲んでいる。だが彼はまだ一本目だ。それを飲みながら聰美に話すのだ。

「それでもまだ飲むんだよな」

「五本は」

「俺四本が限度だけれどな」

「ワインお嫌いですか？」

「あまり酒は強くないんだよ」

中田がこう言うとだつた。周りはすぐに顔を顰めさせてこう突っ込みを入れた。

「いや、ワイン四本つて凄いだろ」

「ただ飲むのが遅いだけでな」

「やつぱり凄いだろ」

「立派な酒豪だぜ」

「そりが?自分ではそりは思わないけれどな」

中田は自覚のない調子で自分でグラスに酒を注ぎながら応える。

「そりが?」

「そりだよ。今も飲んでるしな」

「御前も大して変わらないよ」

「まあいいじゃないか。とにかく飲んでな」

「そうしてだというのだ。

「楽しくやるうな」

「そうですね。ただ」

また彼に言う聰美だった。

「何があつても」

「何があつても？」

「気持ちを確かにされて」

それでだと「うの」だ。

「今様に」

「何かわからないけれど俺はいつもこいつだよ」

中田は笑いながら聰美にも言葉を返す。

「変わらないわ」

「そうですか」

「ああ、じゃあ楽しくな」

こんな調子でだ。中田は酒を楽しんだ。これが聰美との出会いだつた。そしてそれから数日後だ。彼の家族は旅行に出た。快適な一人暮らしがはじまる筈だった。

第零話 炎の覚醒その十五

しかしその彼のところに元いた。不意にだ。携帯のメールで連絡が来たのだった。

「おい、マジかよ」

「あの、とにかくです」

「病院だよな」

「すぐに来て下さい」

いつも連絡が来たのだった。

「(1)家族が

「何でこうなるんだよ」

携帯をすぐに切つてだ。彼は恵々しげに言った。

そしてそのうえでだ。部活に向かう途中でコーターンする。その

彼に友人達が声をかける。

「おい、どうしたんだよ」

「何があったんだよ」

「悪い、今日は無理だ」

いつも彼等に返す。背を向けたうえで。

「明日はちゃんと来るからな」

「病院がどうとかって」

「まさか」

「何もないぞ」

否定の言葉だった。否定になれない状況だとしても言いつてしまつた。

「別にな」

「そうか。それじゃあな

「安心して行つて來い」

「そうしろよ」

「ああ、わかった

友人達の言葉を受けてだ。そのうえでだつた。

彼は自分のバイク、ホンダワルキューに乗りだ。そのうえでだ。
病院にまで向かう。そこに飛び込むとだ。すぐにだつた。

「中田直行さんですね」

「はい、そうです」

「こうだ。入り口で待っていた医者に答える。連絡してきた人ダと
察した。

「俺がその中田です」

「そうですか。それでなのですが」

「親父は！？」

「まずはだ。父から問うた。

「それでお袋は。美和子は」

「ちょっと待つて下さい」

明らかに我を失つている彼にだ。医者は穏やかに告げた。

「まずは中に入りましょう」

「病院の中に」

「はい、話はそれからです
「わかりました」

中田も医者の言葉に頷く。そうしてだつた。

一人で病院の中に入った。その中には。

白く広い。受付もかなり多くの看護士が詰めている。その中を見
てだ。

中田は少し落ち着きを取り戻してだ。その白い世界を見て医者に
言った。

「それで、ですよね」

「はい、三階です」

「三階ですね」

「そこにおられますので」

落ち着きを取り戻した彼への言葉だ。

「では今から」

「わかりました。それじゃあ」

二人はエレベーターに乗りそこから三階に来た。それでだつた。三階もまた白い世界だつた。ただし廊下はクリーム色と言つてい。

そのビニールの廊下を進みながらだ。医者に問うのだつた。

「で、親父達は」

「何とかです」

「何とか！？」

「一命は取りとめました」

最悪の事態はなかつたといつのだ。

「幸いなことに」

「そうですか」

その言葉を聞いてだ。中田は安堵した。しかしその安堵した彼にだ。

医者はだ。そりが言つたのだつた。

「ですが」

「ですか？」

「意識は戻られていません」

「三人共ですか？」

「はい」

医者は沈痛な顔で答える。その白髪を整えた眼鏡の顔が曇つている。

その曇つた顔でだ。彼に話すのだつた。

「意識不明です」

「じゃあまさか

「脳は無事です」

「脳死でもないといつのだ。」

第零話 炎の覚醒その十六

「そして内臓も損傷していますが
「それでもですか」
「回復は可能です。また骨折や韌帯は損傷していても
「身体も何とかですか」
「ですが。傷が深く」
「そうしてだというのだ。
「意識は戻られていません」
「ですか」
「御会いになられますか？」
「そうした状況でもだ。そうするかといふのだ。
「そうされますか？」
「御願いします」
「すぐにだ。答えた彼だった。
「そうさせて下さい」
「わかりました。それでは」
「それで部屋は」
三人が何処にいるか。話はそこに移った。
「何処ですか？」
「あの部屋です」
廊下を進む、やや駆け足で進みながらだ。医者は自分の横にいる
中田に対してもぐさく前の右手に見える部屋を指し示して述べた。
「あそこです」
「あの部屋ですね」
「それでは」
「はい、それじゃあ」
「う話ししてだ。そのうえでだ。
中田は自分でその扉をすぐに開けてだ。部屋に入った。

部屋の中も白くカーテンもベッドも白だった。そしてそこにいる者達も。

三人はそれぞれのベッドの中にいた。その中でだ。

酸素マスクを付けてだ。点滴を受けていた。頭には包帯が巻かれ目を閉じている。そのうえで一言も話さず横たわっているのだった。中田はその家族達を見ていた。自分の隣に来てくれた医者に尋ねた。その顔は家族を見ている。そうしながらの言葉だった。

「あの」

「はい」

「回復しますよね」

「それは」

医者の今度の返答はよいものではなかつた。
沈んだ声でだ。彼に言つのである。

「どうも」

「無理なんですか！？」

「現状を維持するだけでも」

「維持するだけでも」

「かなりの費用が必要ですが」

「手術になると」

「億単位です」

「それだけののだ。費用が必要だというのだ。

「それでも宜しいでしょうか」

「億つて」

「それだけあれば。回復の為の手術を行えます」

「三人共そんなに酷いんですか」

「正直命が無事で後遺症も見られないだけ奇跡です
医者は真剣な面持ちで話してきた。

「まさにです」

「そなんですか」

「あの、それで」

「お金。三人分ですよ」

「はい、それで億単位です」

「それで何億ですか?」

医者に顔を向けてだ。今にも壊れてしまいそうな表情で問つた。

「何億必要なんですか?」

「三億でしょうか」

「三億ですか」

「やはりないですよね」

「とても」

その額を聞いて。予想していたが苦い顔になつてだ。首をしきりに振りだ。そのうえで答える彼だった。

「ありません」

「維持費は」

「そつちばばじうなるんですか?」

「これだけで。保険もあつて」

中田その維持費の話もするのだった。

「どうでしょ?うか

「それ位なら何とかなります」

額と保険のことについてだ。中田は安堵した。本当に最悪の事態はだつた。

第零話 炎の覚醒その十七

しかしだ。これではとだ。そのこともわかつて医者に答えた。

「ですが。手術費は」

「何となればいいのですが」

医者もだ。心から願う口調だった。

「ですがそれは」

「そうですよね。とても」

「奇跡を願いましょう」

最早だ。それしかないというのだ。

「そうしますか」

「そうしますか」

中田は頑垂れるままに話を聞くだけだった。そのうえでだ。

絶望しきつて病院を後にする。そのままバイクに乗りだ。彼はあてもなく走った。

目的地も決めずだ。ただただ走った。彼は何かあるとそうして気分転換を図るのだ。しかし今はそうしてもだ。とてもだつた。

心が晴れない。全くだ。それでもなく走り続ける。

その中でだ。彼は呟くのだった。

「どうすればいいんだよ」

家族のことをだ。呟くのだった。

「本当によ。三億なんてよ」

そのことをまた言うのだった。

「稼ぐか?どうして稼ぐんだ?」

何もかもがわからなくなっていた。考事が堂々巡りになつていく。その堂々巡りの中バイクを進ませだ。夕刻から夜、そして真夜中になつた。

真夜中にバイクを進ませ続ける。周りの車は殆んど見えない。灯りだけが闇の中に見える。その灯り達も今は目に入りはしなかつた。

その闇の中を絶望の中に進んでいく。その彼の耳にだ。
不意にだ。何かが聞こえてきた。

『欲しいですか？』

「何だ？」

『欲しいですか？』

耳ではなく。頭の、いや心にだ。直接彼に言つてきていた。

『それが

『金がかよ』

中田はその心に直接尋ねてくる声に問い返した。

『金が欲しいかつていうんだな』

『どうなのですか？』

また問ひてきた声だった。

『貴方は

『欲しい』

まさにセリフだとだ。彼は即答した。

『三億な』

『そうですか。欲しいのですね』

『けれどそんな金何処にあるんだ？』

そのことをだ。彼は声に言い返した。

『ないだろ。どうしようもないだろ』

『あります』

そうだとだ。声は言つてきた。いいじだ。中田さんの声の質に気が付いたのだった。

『あんた、女か』

『そうなります』

『そうか、女なんだな』

そのことにだ。今ようやく気付いたのだ。絶望しきつてこる心が

だ。気付くことを遅らせてしまつていた。

『それなら直接話したいんだがな』

『残念ですがそれはできません』

「訳ありかい？そもそも何で姿を見せないんだい？しかも『

『しかも？』

「バイクで走つてゐる俺に『うして声をかけられぬ』

その有り得ないことからだ。中田は声に對して言つた。

「あんた、何者だよ。若しかして」

何かというのだ。その声の主は。

「人間じゃねえだろ」

「それは」

「何だ？地縛霊とかそんなのか？」

半分冗談混じりにだ。声に言つた。

「生憎そういうのはお断りだぜ」

「違います」

しかしだ。声はそうした存在ではないといつのだ。

「私はそうした存在ではありません」

「悪霊じゃないのかよ」

「はい、やうではありますん」

「うづづつのだ。」

第零話 炎の覚醒その十八

「それは約束します」「じゅああんた何者なんだ?」「確かに靈的な存在です」「靈的ねえ。精靈か何かか」「そう考えて頂いていいです」「わかつた。じゃあ精靈って考えてな」
そのうえでだとだ。声に言う彼だった。
「あんたは俺に何か用なのかい?」「貴方は今お金が欲しいですね」「さつきも言つたと思うけれどな」「必要ですね」「三億な」
それだけの額が必要だといふことをだ。声に話すのだった。
「それだけ必要なんだよ」「わかりました。三億ですね」「出せるかい?三億」
出せる訳がないと思いながら声に問つた。
「それだけの金な。どうだい?」「若しも貴方がです」「俺が?」「俺が?」「これから剣を手にして戦われるならです」「何だ?殺しでもしろつていうのかよ」
そう考えてだ。中田の顔が曇つた。
ヘルメットの中の顔をそつさせてだ。声にこいつ返した。
「悪いけれどそつしたことにはな」「いえ、殺人ではありません」「何だよ、じやあ何なんだよ」

「貴方が望まれるならです」

前置きを強調してだ。そうして言つてきた声だった。

「私は貴方に剣を授けます」

「それで戦えつていふんだな」

「魔獸達と戦い倒し」

「魔獸ねえ。話が洒落にならない方向に進んでるな」

「そして他の剣士達ともです」

「戦つて勝てばだな」

「その都度お金が入ります」

そこまで聞いてだ。中田は話をまとめでこいつ言った。

「成程ね。それで三億ね」

「どうされますか?」

「他の剣士つてのが気になるけれどな」

それでもだとだ。中田は言った。

「魔獸を倒したら金が入るんだな」

「黄金としてですが」

「わかつたぜ。じゃあ黄金、金貰ひばり

「では。剣士になられますね」

「ああ、なるや」

バイクを運転したまま声に答える。

「そうさせてもらひうな」

「わかりました。それでは」

「で、剣だよ」

話が決まったところでだ。中田は早速声に尋ねた。

「剣は何処だよ」

「契約成立だろ?じゃあ早速」

「はい、丁度いい具合にです」

「どうかとだ。声の具合が変わってきた。
「魔獸が来ました」

「何処だよ。何処に出て来たんだよ」

「前に」

「前?」

「はい、前から来ます」

声はこいつ言つとだ。実際にだ。

「貴方の前からです」

「前から・・・・・んつ!?

目をこらすとだ。そこにだ。馬がいた。

しかし只の馬ではない。首がある筈の部分には人間の上半身がある。若い濃い髪の男がだ。首の場所に生えていたのだ。

その姿を見てだ。中田はすぐに言つた。

「あれつてよ」

「おわかりですね」

「ケンタウロスだよな」

「はい、ケンタウロスです」

「ギリシア神話に出て来るあれかよ」

その姿でわかつた。すぐにだ。

第一零話 炎の覚醒その十九

「あれと戦つて勝てばいいんだな」「黄金が手に入ります」「わかつた。黄金だな」「では。戦われますね」「三億の為にな。それでな」「はい、それで」「はい、それで」「剣は何処だよ」「ここで尋ねたのはまたのことだった。「その剣つてのは何処にあるんだよ」「念じて下さい」「念じる！？」」「はい、念じて下さい」「こう彼に言うのだ。
「その手に剣があると」「それでいいんだな」「はい、そうすればです」「剣が出てくるんだな」「今度からそうして頂ければいいですから」今からではないとだ。こうも話す声だった。「ですから」「ああ、わかつたぜ」中田もその言葉に頷く。そうしてだつた。バイクに乗りながらだ。両手をハンドルから放し。そうして。両手に同じ大きさの日本刀を出した。刃のところにそれぞれ波がある。赤い唾と柄でだ。刀身も赤く輝く。そうした異様な刀だった。その刀を見てか。声がこう言ってきた。

「その刀が貴方の刀ですか」

「何だ？おかしいか？」

「刀は。貴方がイメージされるものがそのままです」

「出て来るつてのか」

「貴方は一本ですか」

「二刀流なんだよ、俺つてな」

笑顔でだ。こう返す中田だった。

「それが俺の剣道のスタイルなんだよ」

「そして力はそれですね」

「力？」

「剣士はただ剣で戦うだけではないのです」

「その力も使うつてのか」

「そうです。そして貴方の力は

「赤いな。つてことは」

どうなのかだ。中田は自分で考えて話した。

「火か？」

「はい、炎です」

声もだ。それだと答えた。

「それが貴方の力になります」

「火ねえ。何か面白いな」

「面白いですか」

「この力でのケンタウロスと戦えばいいんだよな」

「その通りです」

「わかつたぜ。じゃあな」

バイクを足だけで操りながらだ。そのうえでだ。自分に向かい突き進むケンタウロスを見据える。魔獣は。

中田に向かいつつだ。その手にだ。

何かを出してきた。それは槍だった。手槍をだ。中田に向かつて投げてきたのだった。

「槍かよ」

「槍はどうされますか？」

「どうするかこうするかもないからな」

これが中田の答えだった。それでだ。

その左手の剣を一閃させて。そのうえで。

自分に向かつて飛んで来る槍を上から両断した。槍は真つ二つになり燃えて消えていった。その闇の中で燃えて消える槍を見てだ。

第零話 炎の覚醒その一

中田はだ。「うう声に言った。

「本当に燃えるんだな」

「炎の力です」

「本当に俺の力なんだな」

「剣と。その力を使ってです」

「戦つてそれでか」

「黄金を手に入れて下さい」

「わかつたぜ。それじゃあまずは」

ケンタウロスは今度は槍を構えてきた。それで彼を突き殺すつもりには明らかだった。その距離は最早至近にまで迫っていた。槍も刀も互いに攻撃できる距離だった。それを見てだ。

中田は声に震つまでもなくだ。すぐに己の両手の刀を振つた。その動きは速い。まさに稻妻の如きだつた。その速さでだ。ケンタウロスを狙う。魔獣もだ、

その槍で突こうとする。忽ち打ち合いになる。

バイクも足も止まりだ。それぞれ何合も何合も重ねる。その中でだ。

中田は右手の刀から突きを出した。それは、

ケンタウロスの喉を貫いた。それで終わりだつた。

魔獣は動きを止め忽ちのうちに刀から出る炎に包まれだ。燃えて消え去つた。

そしてその消え去つた後には何枚かの黄金の棒が残つた。中田はそれを見て声に尋ねた。

「それでこれをだな

「はい、そうです」

「売つて。そうしていって

「お金にして下さい」

「少し回りくどいけれどいいか」

中田はその手順はもう構わないとした。

「金が手に入るんだからな」

「それで三億ですよね」

「ついでに生活費もだな」

「生活費?」

「今気付いたんだよ。親父は会社員でお袋はパートに出てるんだよ。今日の平均的な家庭であると言える。むしろこの方がかも知れない。その二人も今入院してるんだよ」

「それでお金が必要ですか？」

「俺の生活費はどうなるんだ?」

「働いているその二人がいなければどうつかというのだ。

「アルバイトをしてもいいけれどな」

「ではそこでお金をですか」

「ああ、戦つて手に入れるぞ」

「そうしてだ。生活費もだといつのだ。」

「そうすればいいよな」

「それじゃあですね」

「金つてのはとにかく必要だからな」

「では」

「その分も稼がせてもらひます」

「彼は言った。

「充分にな」

「そうされますか」

「ああ。それでな」

「はい。一体何でしようか

「こうして魔獣を倒していくば金が手に入るんだな

「倒せば倒すだけです」

「そうだとだ。声も答える。

「そうなります」

「そうか。話通りだな」

「そして剣士を倒せば」

「金がもっと入るんだな」

「魔獸の比ではありません」

「そこまでだというのだ。」

「かなりのものになります。それにです」

「それに？」

「魔獸もそうですが」

「この前置きしてだつた。中田に話すことねえ。」

「剣士を倒せばそれだけ貴方も強くなりります」

「剣士の強さをそのまま取り込むってことか」

「そうです。魔獸についてもです」

「倒せば倒すだけ。強くなるのか」

「その通りです。剣士は特にそうしたものが大きいのです」

「強く、ねえ」

「その強さといつ言葉にもだ。中田は反応を見せた。

第零話 炎の覚醒その一十一

そのうえでだ。彼はこんなことでも呟つた。

「まあそれもいいな」

「強くなりたいですか」

「だつてあれだろ？ 戦えばな」

「はい、戦えば」

「それで強くなつて」

そのうえでだと「うの」だ。中田は強さだけを見てはいなかつた。
強くなりどうするか。中田が今声に対してもうのはこのことについて
だつた。

「より強い魔獣や剣士を倒せば余計にな」

「多くの黄金や糧を得られます」

「じゃあそれでいいわ」

笑顔で応えて言つた中田だつた。

「強くなつてみせるわ」

「そう仰いますか」

「ああ、この言葉は撤回しないぜ」

笑顔で言つた。そのうえでだ。

中田は黄金を拾いだ。それ等を全て口の嚙みに入れた。

そうしたうえで。声に対してもう尋ねた。

「今のところこれで終わりだよな」

「はい、終わりです」

その通りだと答える声だつた。

「もう魔獣はいません」

「そうか。それじゃあな」

「休まれますか」

「家に帰つてな」

そのうえでだといつのだ。

「そうさせてもらうぜ」

「わかりました。それでは」

「こうしてだつた。彼は剣士となつたのだった。そうしてだ。魔獸を倒していく。そして他の剣士達とだつた。

「それでだよ」

「何でしようか」

声は何時でも彼と共にいた。そうして彼の問いに答えるのだった。

「俺の他の剣士な」

「彼等ですね」

「そいつ等は出て来るんだよな」

「今もそれぞれです」

「魔獸と闘つてるんだな」

「貴方と同じです」

「そのだ。中田とだというのだ。」

「貴方を含めて十三人です」

「十三人！？俺も入れてか」

「はい、十三人です」

「それだけだというのだ。」

「その十三人の剣士達がです」

「闘つてそれでか」

「最後の一人になれば」

「どうなるんだ？一人になれば」

「究極の力が手に入ります」

「究極のつて何だよ」

「勝てばわかります」

「そうすればだというのだ。」

「最後まで勝てば」

「何かわからないけれど俺はな」

「彼はどうするか。それはもう決まつてこる」とだった。

「三億の為にな」

「闘われますね」

「ああ、決めた」

「そうだとだ。一本の刀を手にして言った。

「家族の為に闘うんだよ」

「わかりました。では頑張つて下さい」

「三億。一回の戦いで百万辺りでな

「大体三百回ですね」

「洒落にならない位闘わないといけないか」

「ただ剣士一人で一億かと」

「それだけの黄金が入るというのだ。

「それだけの黄金が入りますので」

「わかつたぜ。一億だな」

「そうです。剣士同士の戦いはそれだけの価値があるものです

「価値!?

「・・・・・・・・

「価値という言葉についてはだ。声は急に沈黙したのだった。

中田もそれが気になつたがだ。それでもだつた。

言わないのなら聞かなかつた。それが彼のやり方だつた。

それでだ。こう声に言つのだった。

「とにかく

「はい、とにかくですね」

「戦つて勝てばいいんだな」

「あえて単純に言つてのことだつた。

「そうすればいいんだな」

「そうです。頑張つて下さい」

「戦うしかないからな」

中田の表情は明るい。しかしだつた。

その明るさに強い決意も含まれてだ。そのつえでだつた。

「じゃあ。やらせてもらひぜ」

「はい、それじゃあ

これが全てのはじまりだつた。彼は戦いの中に入った。そしてそれはだ。彼の運命を大きく動かしていく。だが彼は今はそのことは知らなかつた。

第零話　完

2011・6・23

第一話 水の少年その一

久遠の神話
第一話 水の少年

八条学園高等部。 そこは剣道部でだ。
道場の中で部員達がだ。 こんな話をしていた。

「何かだいがくにな」

「ああ、そららしいな」

「何か凄く強い人いるつてな」

「そららしいな」

「こうだ。 彼等は休憩時間に落ち着いた顔で話をしていた。
洒落にならない位強くてな」

「しかも二刀流で？」

「バケモノみたいに速いらしいな」

「そんないるからな」

「こうした話をしていてだ。 そこにだ。

一人の少年が来て言うのだった。

背は一七六程で伸ばしたスポーツ刈りの様な髪型をしている。 目
は優しい感じで二重のものだ。 口は一文字でしつかりとしている。
顔は全般的に四角い感じだがエラは張ってはいない。
その彼がだ。 仲間達の話を聞いて言つてきた。

「そんな人が大学にいるんだ」

「ああ、とにかく尋常な強さじやないつてさ」

「全国大会に出てもぶつちぎりの感じで」

「だからバケモノみたいなな」

「そんな強さだつてさ」

「ふうん、そんな人がいるんだ」

紺色の袴の上に防具を着けながらだ。 彼は仲間達に応える。

「一度見てみたいな。 うちの学園だし」

「ああ、じゃあ今度行くか？」

「大学の方に入つてな」

「それで見てみるか」

「どんな人なのか」

「名前何ていうの？」

少年はその大学の剣豪の名前を尋ねた。

「何ていうのかな、それで」

「ええと、名前は？」

「名前は何ていったかな」

「ちょっと。わからないよな」

「だよな」

名前になると。彼等は口の^ノもつてしまつ。だがその中でだ。
一人がだ。この名前を出してきた。

「そうそう、確か

「確か？」

「その人の名前だよな」

「何ていうんだ、それで」

「上城大樹だつたな」

この名前を出すのだった。

「そうだつたよ」

「それ絶対違うから」

少年がすぐに突つ込みを入れた。

「だつてそれつて」

「ああ、わかつたか」

「僕の名前じゃない」

「ううだ。その名前を出した仲間に口を尖らせていつのである。その尖らせた様子がどうにも啄木鳥の様にも見える。特に横から見ると。

「だから絶対に違うよ」

「同姓同名とかさ」

「それでもいるかな」

「ひょっとしたらあるだろ」

その友人は笑顔で話していく。

「若しかしたらな」

「そんな筈ないから」

彼はその可能性を完全に否定する。

「全く。何を言うかって思つたら」

「まあ名前のことは置いておいてな」

彼はそのことは棚に上げてだ。それでまた言つのだつた。

「その人のことは本当だからさ」

「大学にいる人が強いつてことだね」

「ああ、圧倒的だからな」

そこまでだというのだ。

「聞いた話によるとな」

「ううん、本当に一度見てみたいな」

彼、上城は仲間達の話を聞いてまた一つ言つた。

第一話 水の少年その一

「どれだけ強いのかな」「
気とか使つたりしてな」「
竹刀から衝撃波出すとか」「
ゲームみたいな技出してな」「
そんなことできるかもな」「
そんな筈ないじやない」

上城は流石にそれはないと笑つて返した。

「幾ら何でも」

「だから冗談だよ」

「そんなのできる訳ねえだろ」「

その彼にだ。周囲は笑つて話す。

「全く。上城つてな」

「そういうところが真面目なんだよな」

「冗談だったの」

そう言われてだ。彼は憮然としながらも頷くのだった。

「それならそうと言つてくれたらいいのに」

「そんなのわからないか?」

「すぐにわかるだろ」

周囲はその彼に怪訝な顔になつて言ひつ。

「だから。御前はちょっととな」

「真面目過ぎるんだよ」

「真面目で駄目つていうのかな」

上城は今度はこう周囲に問い合わせた。

「そう言つのかな」

「まあそれはさ」

「何ていうか」

「悪くはないや」

「そう、特にな」

「周りもだ。その彼にこう答えはした。

「ただな。一年のほり」

「斎宮みたいにな」

「冗談がちょっとわからないとな」

「しんどくないか?」

「別に。冗談がわからないかも知れないけれど
だがそれでもだというのだ。
特に困つたことはなかつたし」

「じゃあ別にいいのか」

「そう言うんだな」

「うん、僕はそう思うけれど」

「そのだ。彼自身はだというのだ。

「特にな。とにかく大学にだよね」

「ああ、その凄い人がな」

「いるからな」

「じゃあ。一度見てみたいな」

あらためてこう言う彼だった。

「一体どんな人なのか」

「そうだよな。本当にな」

「どんな凄い人なのか」

「見に行くか、今度な」

こうした話をしてだった。彼等は。

土曜日の部活の後で八条大学、高等部の隣にあるそのキャンパスに入りだ。そのうえで大学に剣道場に向かうのだった。

そこは高等部のものよりもさらに大きな道場だった。建てられてから随分と経つているらしく黒い瓦に年季が見られる。そしてだ。

白い壁にも古さが見られだ。そのうえ。

中もだつた。床も踏むと音がしそうだ。奇麗に掃除されているが

それでもだ。年季が見られるのは事実だつた。

その年季のある道場の中にだ。彼がいた。

相手を片つ端から倒す「一刀流」の面の男、それでもうわかつた。彼

「そがだとだ。

「あの人だよな」

「ああ、間違いないな」

「あの人だな」

「一刀流の人あの人だけだしな」
それでだ。わかるというのだ。
その強さを見るとだ。これが。

「本当に強いな」

「どんな人でも適わないじゃないか」

「噂通りっていうか」

「噂以上だよな」

上城達は口々に話す。その彼を見て。
そしてそのうえで彼の垂れにある名前を見る。それは。

第一話 水の少年その三

「中田さんつていうんだ」

「ふうん、それがあの人の名前か」

「そうなんだな」

「このことをはじめて知ったのだった。」

「あの人かな」

「そなんだな」

「噂の二刀流の人なんだな」

「中田さんね」

上城もだ。彼の名前を呟く。そのうえでその名と強さを心に刻む。
これは無意識だがそうしてだ。蛍光灯、これだけは付け替えたのが新しいその灯りの中で照らされている彼の稽古を見てそうしたのだ。

そうしながらだ。彼はこう周りに話した。

「あの人ってさ」

「ああ、強いよな」

「本当に」

「バケモノみたいつていうか」

バケモノという言葉を訂正して。こう言うのだった。

「鬼みたいだね」

「それじゃあ意味同じじゃないのか?」

「バケモノと鬼だとな」

「似たようなものだろ」

「多分違うと思う」

だがだ。彼はこう友人達に話すのだった。

「それはね」

「じゃあ鬼か」

「あの人鬼か」

「そりなのか？」

「そんな感じがするけれど」

今も稽古を、しかも休みなくする彼を見ての言葉だ。

「僕の気のせいかな」

「そうじゃねえのか？」

「彼ら何でもそこまでいかないだろ」

「鬼つておい」

「しかも言い過ぎだろ」

「そうだね。悪いよね」

言つてからだ。そのことに気付いた彼だった。
そして申し訳なくだ。いつも言つのだつた。

「じゃあ。言わないから」

「つていうか鬼なあ」

「そんだけ強いつて意味だよな」

「そうだよな」

友人達は上城の言葉についてあらためて考えて述べもした。

「確かに桁外れの強さだよな」

「あんだけ強いと全国大会もいけるだろうな」

「前からあんなに強かつたのか？」

その彼等も今見ているその圧倒的な強さ、まるで野獸の如き強さ
を見てだ。彼等もこう考えていった。

「つていうかあの強さそつそつすぐになるか？」

「戦い方も何かな」

「襲い掛かつて切り捨てるみたいな」

「そんなのだけれどな」

「すぐにああなるのかね」

「相当な修羅場積んでないか？」

「人がこんなことを言つた。

「さもないとあそこまでなれないだろ」

「そりだよな。ちょっとやそっとじゅな

「..」

「なれないよな」

「ああ、あいつね」

その彼等にだ。大学の剣道部員が言つてきたのだった。防具を着けたままだがそれでもだ。彼等に対してもう言つのだつた。

「最近急にだよ」

「急になんですか」

「強くなつたなんですか」

「そなんですか」

「いや、前からかなり強かつたよ」

それは事実だというのだ。

第一話 水の少年その四

「前から強い」とは強かつたんだよ

「けれどそれでもなんですね」

「最近になつてですか」

「滅茶苦茶強くなつたんですか」

「そつだつたんですか」

「そう。まあ性格はそのままだけれど」

性格はそのまままだというのだ。だが強さは変わつたといつのだ。

中田は今もだつた。一気に前に出てだ。

屈み相手の胴を切り抜いたのだった。

それで一本だつた。その一本を見てだ。

上城は唸る様にして言った。

「速いし凄い威力だね」

「切り抜いたつて感じだけれど」

「真剣だつたら真つ一つだよな」

「そんな勢いだよな、あの銅は」

「普通の剣道じやないだろ」

「そう思うだろ」

実際にそうだらうとだ。大学の部員も話す。

「今あいつと戦えるのはな」

「いないですか?」

「大学にも」

「いないね」

まさにだ。そうだといつのだ。

「あれだけの強さの人間は」

「けれど何か」

「どうかとだ。上城が言つた。

「餓えてるみたいですね」

「餓える？」

「そんな感じがします」

「ううその大学生に話すのだった。

「僕の氣のせいでしょうか」

「餓てるね。そういえばそつかな」

「やっぱりそう思いますか？」

「言われてみればね」

彼にしてもそれで気付いたというのである。

「そんな感じだね。今まででは素早いだけだつたけれどもむしゃらになつて」

「そのがむしゃらな闘い方がですか」

「どうしてああなつたのか気になるね」

大学生にしてもだ。そうだといふのだ。

「俺達にしても」

「そうですか。やっぱり」

「うん。本当に急にああなつたんだよ」

強くなつたといふのだ。獣めいた強さにだ。

「ただ。あれで性格は」

「前と同じですか」

「うん、同じだよ」

「そうだといふのだ。とにかく性格は変わらないといふのだ。

「あれで明るくて飄々とした奴でれ」

「明るいんですか」

「うん、明るくていい奴だよ」

中田のその性格についても話されていく。性格的にはそうした人

間だといふのだ。ただ変わつたのは剣道の強さだといふのである。

「ああした闘い方だけれどね」

「防具着けたら性格変わる？」

「そういう人もいるよな」

「ああ、いるいる」

「中には肩になる奴もいるしな」

高校生達はここでこんな話をする。残念なことに剣道をしているからといって人間性までよくなるとは決して言えないのだ。中には、とりわけ学校の教師が剣道をする場合は精神の鍛錬が伴っていない輩が多い。教師にそうした輩が多いのは日教組の問題であろうか。

「世の中色々な奴いるからな」

「肩も多いよな」

「剣道する資格がないようなな」

「そんな奴が」

「ああ、この前そういうの来たよ」

ここで大学生がまた彼等に話す。

「中学生の子供達がここに来たんだよ」

「見学ですか？」

「それでなんですか？」

「いや、稽古で」

それで来たというのである。

「それはよかつたんだけれどね」

「問題があつたんですか」

「多分。その引率の教師に」

「ああ、大学生相手だし初心者の子もいたけれど
それでもだというのだ。」

第一話 水の少年その五

「俺達の田の前でその子が動きが悪いって言つてひっぱたいたんだよ」

「えつ、動きが悪いってだけでなんですか」

「生徒をひっぱたいたんですか?」

「それってちょっと」

「しかも膝で蹴つたりして」

尚且つだつた。暴力をさらに振るつたといつのだ。

「俺達も見てびっくりしたよ」

「いや、普通そんな教師いないでしょ」

「その教師頭おかしいですよ」

「流石学校の教師ですね」

一人がこんなことを言つ。彼にとつては学校の教師という人種は問題を起こすものらしい。残念だがその割合が多いかも知れない。

「そんなことするなんて」

「つていうか無茶でしょ」

「そう。しかも合同稽古で中学生、自分が教えている生徒にね」

「その生徒に?」

「今度は何したんですか」

「突きを入れてたんだよ」

それを聞いてだ。上城達は啞然となつた。何故ならだ。

「あの、中学生に突きつて」

「まだ身体のできない子にですか?」

「それって滅茶苦茶危ないですよ」

「つていうかそれ常識なんじや」

柔道の締め技等もそうだが何故剣道で中学生に突きが禁止されているのか。まだ身体が出来上がっていない相手にそれはあまりにも危険だからだ。

しかしその教師はだ。平然としてそうしたところのだ。

「そんな常識ないのが教師ですか」

「まあ。教師らしいっていえばらしいですけれど」

「それはかなり」

「酷いんじゃ」

「そう、しかもシャベル突きつていつてね」「突きの問題はまだ続いていた。今度は。

「下から上に思い切り突き上げる技があるんだけれど」

「そんな技試合で使つたら反則ですよね」

「即刻退場ですよね」

「教師が生徒に使つ技じやなくてそれつて」

「リンチ技ですよね」

「そう、それも使つてね」

「そうした外道と言つてもいい技をだ。生徒に平然として使つたといふのだ。

「俺達にも使つたけれどね」

「稽古でそんな技使つて」

「その教師つて何なんですか？」

「ヤクザじゃないですね」

「今時ヤクザでもしないだらうね」

「大学生も顔を蹴めさせて言つ。」

「そんなことはね」

「そんな教師がここに来てですか」

「稽古してたんですか」

「あんまり酷いんで俺達も怒つて」

「それでだと。大学生は話を進めてきた。

「言おうとしたらね」

「ここで親指でだ。大学生から見て背中にいる中田を指し示す。上

城達に話している為彼に対しても背中を向ける形になつてゐるのだ。

そのうえでだ。こう彼等に話すのだった。

「あいつが出て来てね」

「それでどうしたんですか？」

「まさかその教師を」

「そう、叩きのめしたんだ」

「そうしたというのだ。その異常な教師をだ。

「もうね。完膚なきまでね」

「何か格好いいですね、それって」

「悪者を成敗した感じで」

「うん、中学生の子供達も喜んでいたよ」

つまりそれだけその教師は生徒達に評判が悪く人望がなかつたといふのだ。人は圧倒的な暴力の前には無抵抗になる。しかしだからといって反抗の気持ちは完全に抑えられないものだ。それは何時か何らかの形で刃となりその暴力を振るう者をハつ裂きにするものだ。

「よくやつてくれたつて感じでね」

「その教師まんま悪役ですね」

「ドラマに出て来る屑みたいですね」

「剣道四段つて言ってたけれど

段がそれでもだというのだ。

第一話 水の少年その六

「あいつの方が圧倒的に強かったし。そもそも心の鍛錬はできていなかつたから」

「つまり段で強さって決まらないんですね」

「そうなんですね」

「あいつは八段以上の実力があるね」

中田を見て話すのだった。

「今はね」

「八段以上って」

「洒落にならない強さですよね」

「そこまでの実力って」

「うん。とにかく強いから」

また上城達に話すのだった。

「あいつとは稽古をしてもね」

「いいんですね」

「そうしても」

「するといいよ。高等部の先生はできた人だし」

少なくともだ。その中学の教師とは全く違うといつのだ。

「こっちからも話をしようか?」

「あっ、じゃあ御願いします」

「そうしてくれるんなら」

彼等にしてもだ。その話は願つてもないことだった。強い相手と稽古ができるということはだ。それだけ得られるものが多いからだ。

それでだ。上城も言うのだった。

「じゃあ中田さんとも」

「ああ、じゃあ稽古してくれよ」

「はい、わかりました」

「それじゃあ

他の面々も頷きだ。こつしてだつた。

上城達は中田の稽古を見てだ。その帰りにだ。

上城の前にだ。肥満したパーマの男が出て來た。

鋭いといつよりか剣呑な目をしており荒んだ表情をしている。肌は黒く顔も膨れている。みすぼらしい服に右手には竹刀を持つている。

その彼がだ。上城に対してもうつのである。

「おい、そこの御前」

「僕ですか？」

「そうだよ。御前だよ」

まるで因縁をつかむかの様な口調である。

「御前何でここにいるんだ」

「何でつて通学路だからですけれど」

「通学路だからこるのか

「はい、そうです」

その通りだと答える彼だつた。

「それが何か

「御前、剣道やつてるな」

彼が背負つている竹刀袋を見ての言葉だつた。

「そうだな」

「ええ、まあ

「何段だ

「一段です

「俺は四段だ

男は自分から言つてきた。己の段をだ。

「俺は強いんだ」

「四段でしたらやつぱり

「何でその俺が負けたんだ」

見れば表情がおかしい。どうやら酔つているらしく。

言葉にもろれつが回つていない。その彼が言つのである。

「あんな若僧に」「元に

「あの、どうされたんですか?」

「俺は偉いんだぞ」

男は今度はこんなことを言つてきた。

「先生様だ。先生様なんだぞ」

「学校の先生なんですね」

「ああ、そうだ」

その通りだと。ふらつく足で名乗るのである。

「そりなんだよ」

「そうですか。先生なんですか」

「糞つ、何で俺をクビにしたんだ

問われてもいないのにだ。こんなことも言つ男だった。

「教育委員会の連中はよ

「クビつて

「生徒を殴つて何が悪い」

どうやら暴力肯定主義者の様だ。その喋り方からわかる。

「駄目な生徒を殴つて何が悪い

「あの、それは」

「五月蠅い。反論するな

酔つた血走った目での言葉だった。

第一話 水の少年その七

「御前なんかがな」
「けれど暴力は」
「教師はな、偉いんだぞ」「まだこんなことを言う男だつた。
「その俺が何してもいいだらうが」「だから暴力を振るわれたんですか？」
「そうだよ。悪いかよ」
男は言いながらだ。上城に近付いてくる。それを見てだ。
上城は身の危険を感じた。それで身構える。
しかしここでだ。彼の後ろからだ。
声がしてきたのだつた。その声は。
「おいおい、今度は通り魔かい？それとも絡んでるのかい？」
「手前は」
「あんた、本当に肩だね」
その大学の剣道部で圧倒的な強さを見せていた。男がだ。上城の
後ろから出て來たのだ。上城は彼の姿を見て教えてもらつた名前を
口にした。
「確か」
「ああ、中田つていうんだ」
彼の方から名乗つてきた。
「有名人みたいだから覚えてくれよ」
「はあ」
「で、あんたは下がつておいてくれ」
「この上城に言うのである。」
「このは俺がやるからな」
「貴方がですか」
「この太つたおっさんはな」

その目の前の濁つた男を指差して言つのである。

「人間の肩なんだよ」

「人間の肩つて」

「社会に不要なダニとも言おうか?」

中田は男を見ながら言つのだつた。

「部活で聞いてただる。ほら、あの」

「あの生徒に暴力を振るつてたつていつ」

「その暴力教師だよ。元な」

「元つてつまりは」

「俺に叩きのめされてそれでな」

それでだというのだ。さらにだ。

「今までの悪事がばれて懲戒免職になつたんだよ」

「そういう人なんですね」

「で、今は落ちぶれてな」

「こんな風になつてるんですか」

「まあよくいる社会不適格者さ」

学校の教師には多い。悲しいこと。

「そういう奴なんだよ」

「そなんですか」

「ああ。それでな」

それでだとだ。中田は上城にあらためて話す。

「多分ハつ当たりで誰彼なく殴りに出てたんだな」

「誰彼なくつて」

「その竹刀が何よりの証拠さ」

「そうだ。竹刀がだというのだ。」

「この肩にとつちゃ竹刀つてのは人を殴る為のものでしかないんだよ」

「それつて」

「それを聞いてだ。上城もだ。
眉を顰めさせてだ。こう言つのだつた。

「間違つてますよ」

「あんたはそれがわかつてるんだな」

「剣道は己を律するものですから」

その真面目な考え方だ。彼は中田にも話した。

「そんなの間違つてますよ」

「そうだよ。それはな」

「はい、剣道をする資格がありません」

毅然としてだ。上城は言い切った。

「人間として最低です」

「どうか最低つて言葉もまだ甘いけれどな」

「そこまで酷い人なんですか」

「だから俺も叩きのめしたんだよ」

その元教師を見据えながらの言葉だった。

第一話 水の少年その八

「あんまり酷いからな」

「その御前のせいだ」

怒った声でだ。彼は言つのであった。

「御前のせいで俺はクビになつたんだよ」

「俺のせいでかい？」

「そうだよ。御前のせいだ」

完全にだ。他人のせいにする言葉だった。

「御前が俺のことを教育委員会にちくつたんだな」

「全部調べてそこと警察にも通報してやつたぜ」

「だからだ。俺は生徒の親から刑事告訴も受けてるんだ」

「ああ、じゃあ近く刑務所だな」

「PTAにも叩かれてクビにもなつて」

「で、臭い飯か。栄転だな」

「全部御前のせいだ。御前のせいでこうなつたんだ」

まだ言つ元教師だつた。中田に対して喚きたてる。

「俺の人生どうするんだ。どうしてくれるんだ」

「その台詞あんたの生徒達に言つんだな」

中田はあえて冷たくだ。元教師に言つのだつた。

「あんたに虐待されていた生徒達にね」

「あいつ等が何だつていうんだ」

「あんたの生徒だろ？？」

「生徒は俺の為にあるんだ。俺が部活を強くしてだ」

それでだとだ。完全にエゴで言つ。

「それで俺が評価を高めて偉くなる為に必要なんだよ」

「あの、それは」

上城もだ。傍で聞いていてだ。

呆れてだ。その元教師に言つのだつた。

「あんまりじやないんですか？」

「何が言いたいんだ」

「生徒を育てるのが教師ですよね」

その常識から元教師に問うた。怪訝な顔で。

「偉くなるために利用するつて」

「生徒なんてな。教師の為にあるんだよ」

まだ言うのだった。

「あいつ等を強くさせたら俺の評価があがるんだよ」

「だからそれは」

「五月蠅い！俺の生徒だ！」

まだ言うのであった。

「俺が何しようと勝手だろ！」

「貴方という人は！」

「はい、ストップな」

激昂する上城にだ。中田が言つてきた。

「これ以上話しても無駄だよ」

「無駄つて」

「世の中こう言つ奴もいるんだよ」

笑いながらもだ。元教師を見据えての言葉だった。

「どうしようもない肩がな」

「けれど。これじゃあ」

「どつちみちこいつは破滅ぞ」

懲戒免職、そして刑事告訴だ。そうなるのは明らかだった。

こう言つてだ。中田は。

元教師にだ。こうも言つた。

「あんた、もう消えろ」

「何つ！？」

「大人しく裁判を受けて臭い飯食つてろ」

これが元教師への言葉だった。

「それが一番助かる道だ」

「俺が刑務所に入るつていうのかよ」

「そうだよ、刑事告訴されて検察が受理してな」

「しかもだつた。さらにだ。

「証拠も次から次に出てるんだ。それで刑務所に入らない筈ないだろ」

「俺は教師だぞ」

「元な」

「何で教育で捕まるんだよ」

「まともな教育者が刑事告訴なんかされるか」

中田は醒めた調子で元教師に告げる。

「そうじやないのかよ」

「御前まだ言うのか」

「何度も言つや。せつさと刑務所に入れ

中田の言葉は変わらない。

第一話 水の少年その九

「それで罪を償え」

「元はといえば御前のせいだ」

元教師は中田に竹刀を突きづけてきた。聞合いはかなり離れるがそれでもだ。

「御前が俺を任せて通報したからな」

「犯罪者を通報するのは市民の義務なんだけれどな」

「だから俺は教師だ。あれは教育だ」

「まだ言うのかね。誰もそうは思わなかつただひ

「どういつた通報か。中田はそのことも話した。

「俺と一緒に部員も顧問の先生も全員通報したよな

「うう・・・・・・」

「その悪い頭でもいい加減に理解しろよ」

今度はこんなことを言つ中田だつた。

「あんたもう終わりなんだよ。終わりは奇麗にしきよ

「くつ・・・・・・」

「わかつたら消えろ」

最後通告だつた。

「それで一度と人前に出るな

「まだ言つのか」

「もう言いたくないな。あんたの汚い顔は見たくないからな

「俺をまだ侮辱するのか」

「侮辱じゃなく事実を言つてるんだよ

それだというのだ。

「わかつたな。じゃあ消えろ」

「手前！」

元教師は彼の言葉に激昂してだ。竹刀で襲い掛けた。それを見てだ。

中田は両手に何かを出した。それで。

一気に踏み込んでだ。一瞬のうちに無数の攻撃を打ち込んだ。
それが終わり元教師の後ろに出てだ。言つのだつた。

「馬鹿は死んでも治らないんだな」

「うつ、俺がまた」

「あのな、剣道ってのは暴力じゃないんだよ」

その両手のものを何処かにしまつてからだ。己の後ろこつる教師
を横目で見て言った。

「剣を使うんだよ。やつこつものなんだよ」

「まだ言うのか」

「あんた、両手両足の腱も靭帯も切つておいたからな
それでだというのだ。

「それも強くな。完治しても一生竹刀も握れないし生徒を殴る」と
も蹴ることもできないからな

「糞つ、じゃあ俺は」

「もう何の力もない。只の下種豚だよ」

そうした無様な存在に過ぎないとつのだ。

「まあ。諦めて罪を償つんだな」

「くつ・・・・・・」

「今日のことも警察に通報するからな

中田はこのことを言うのも忘れない。

「精々罪を償つてくれよ」

「おのれ・・・・・・」

こうしてだつた。元教師は無様に崩れ落ちてだ。この話は終わつ
た。

上城はそこまで見てだ。中田に尋ねたのだった。

「あの」

「ああ、こいつはもう完全に終わりだからな

その暴力教師じゃなくて」

彼のことではなかつた。もうそんなつまらない人間はどうでもい

いというのだ。

代わりに中田にだ。 じつ尋ねたのである。

「今さつきですけれど」

「さつき？」

「何使われたんですか？」

戸惑う顔で中田に尋ねるのだった。

「両手に持たれていましたけれど」

「ああ、あれな

「はい、何だつたんですか？」

「これだよ」

笑つてだ。 出してきたのは。

一振りの日本刀だつた。 どちらも同じ大きさだ。

その赤く輝く刀を見せてだ。 上城に話すのである。

「これな

「何時の間に」

「背中に背負つてゐるんだよ」

これは誤魔化しの言葉だ。 しかしそれでも上城は今の言葉は信じた。 話があまり急なので細かいところまで考えが及ばなかつたのだ。

第一話 水の少年その十

「そうしてるんだよ
「刀ですか」
「許可も得てるさ」
「これは嘘だが。やはり上城は気付かない。
「ちゃんとな」
「だつたらいいんですけれど」
「ついでに言えばミネ打ちだからな
「死ぬとかもないんですね」
「斬つたら流石にやばいだろ」
笑つてそれはないというのだ。
「殺したらな」
「それはそうですけれどね」
「だからそれはしないさ」
「再起不能にしただけなんですね」
「そういうことだ。まあ手を出してきたのは向こうだ」
「ですね。それは」
誰がどう見てもだた。それは。
「この人が先に」
「それならいいさ。一件落着だ」
「ええ。ただ」
「ただ?」
「中田さんでしたよね」
上城は彼のその名を確めたのだ。
「そうですね」
「ああ、そうだけれどな」
「お話を聞いてましたけれど」
「何だ?俺がもてるってか?」

「いえ、そうした話は聞いたことないです」

上城は素直だ。だからこう答えたのだった。

「強いつてことです」

「ああ、そのことか」

「本当に。こんなでかい人を倒すなんて」

「こいつの強さは薄っばらいからな」

「薄っばらい?」

「ああ、弱い者いじめの為の力だからな」

それでだ。薄っばらいことこのものである。

「そんな奴の強さはな」

「薄っばらいんですか」

「力つてのはそういうのに使つんじゃないんだよ」

「じゃあ何の為に」

「目的の為だよ」

その為だとだ。中田は上城に話す。

「目的の為にあって使つものなんだよ」

「目的?」

「ああ、目的だよ」

また上城に言つ彼だった。

「それぞれの目的の為にな」

「あの、それって」

「ああ、わからないならいいさ」

中田は上城の疑問の言葉には笑つて返した。

「それならな。あんたは関係ないしな」

「関係ないって」

「そうだ。関係ないからな」

屈託のない笑顔でだ。中田は上城に言つのである。

「俺の話さ」

「中田さんの」

「さて、じゃあ俺はこれでな」

「帰られるんですね」

「俺の家にな。帰つて飲むつもつわ」

「お酒ですね」

「酒好きなんだよ」

笑顔でだ。彼は酒の話もした。

「酒なら何でもいけるぜ」

「お酒なら僕も」

上城も飲んだりする。好きな方だ。

「飲みますけれど」

「じゃあ今度一緒に飲むか?」

中田は気さくな調子で上城を誘いもした。

「いい店知ってるぜ」

「あそこですか?スター・プラチナ

「あのカラオケ店だな」

「それか白鯨か」

上城はこの店の名前も出した。彼等が今いる八条町にある居酒屋だ。スター・プラチナと同じビルにあり同じ家が経営している店なのだ。

第一話 水の少年その十一

そこでだ。どうかといつのだ。
「そこはどうですか？」
「ああ、どちらも行くぜ」
「やつぱりそうなんですか」
「まあ。機会があればな」
一度飲むというのだ。
「そうしような」
「ええ、機会があれば」
「ただ。今はな」
今はどうするかといふと。それは。
「一人で飲みたい気分だからな」
「それでなんですね」
「ああ、これでお別れだよ」
そうだといつてだ。そうして。
中田は上城に背を向けてだ。最後に言つた。
「じゃあな」
「はい、さよなら」
「またな」
「またな」
こう挨拶をしてだ。それでだつた。
彼等は別れた。中田は夜の道の中に消え上城も自分の家に戻つた。
家に帰るとだ。すぐにだつた。
彼の母親、小柄でまだ若さの残る顔立ちの彼女がだ。彼にこいつ言つてきたのだ。
「あれ、今日は遅かつたわね」
「ちょっと人とお話してたんだ」
「人つて？」
「大学の人と」

中田のことをだ。ありのまま話すのだった。

「少しね」

「それで遅かったの」

「うん、僕と一緒に剣道をしてる人で」
母にこのことも話す。話をしながら制服姿でテーブルに座る。だがそこにはまだ料理は来ていない。母が冷蔵庫から出そうとしているところだった。

それを見ながらだ。彼は話すのだった。

「凄く強い人だったんだ」

「そんなに？」

「うん、もう鬼みたいなね」

そこまでだと。母には鬼だと話す。

「滅茶苦茶強いんだ」

「鬼なの」

「そう、鬼」

「」う話すのである。

「とんでもない位にね」

「じゃああんたよりもね」

「僕なんか全然だよ」

「比べ物にならないの」

「そう、あんなに強い人いないかもね」

「」ここまで言うのだった。

「いや、本当に」

「じゃああんたはね」

「僕は？」

「その人みたいになりたいのね」

母は微笑んで我が子にこう尋ねた。

「そう思つてるのね」

「そうだね。言われてみればね」

「そうよね。だから言うのよね」

「あんな強い人になれるかな」「なれるでしょ。努力すれば」

「努力すればだね」

「そう、なれるわよ」

「また我が子に言つ母だった。

「けれどあなたも」

「僕も？」

「一段だし。段位の話じゃないけれど」

「強いっていうんだね」

「高校生では強い方でしょ」

剣道部ではレギュラーだ。八条学園高等部の剣道部は県内有数の強豪もある。従つて彼の強さもかなりのものなのである。だが、だ。上城はこう母に言つのであった。

「僕なんかとでもだよ」

「そんなに凄いの」

「僕は高校生でその人は大学生で」

年齢のことも話すのだった。学生の頃はその強さに年齢が大きく関係する。熟練だけでなく体格や運動能力の違いが出てである。

第一話 水の少年その十一

「それにその人の強さはね
「鬼なのね」

「本当に八段の強さはあるね」

あの元教師を一瞬で成敗したことを見てだ。それで話すのだった。
「そこまでね」

「八段？ 大学生で？」

「それだけの強さはあるね」

「そうなの。じゃあ全国クラスね」

「それ超えてるんじゃないかな」

全国クラスどころではない。それまでの強さだと母に話す。

「鬼だから」

「鬼ね、ここでも」

「そう、鬼神だから」

そうだとも話す彼だった。その話を聞きながらだ。
母はだ。我が子に優しい声でこうついつてきつてきた。

「それじゃあね」

「それじゃあ？」

「食べなさい」

今度言つのは「こと」だつた。

「いいわね」

「ああ、晩御飯ね」

「まず食べる」とよ

「強くなるにはだよね

「食べないと死ぬのよ」

話がかなり根本的なものになる。生きているからには食べなければ死んでしまう。母が言つのはそのことからなのであつた。

「そして栄養のものを食べると

「その分身体がよくなつて
「強くなるから。いいわね」

「うん、そうだね」

その通りだとだ、上城も頷く。そうしてだつた。
実際に食べはじめる。その中でだ。

「ところです」

「どうしたの？」

「今日の御飯何でこれなの？」

「麦飯だから？」

「そう。何で麦飯なのかな」

見ればだつた。上城がお碗に入れている御飯の中には麦も入つて
いた。彼はそれを食べながらだ。母にそのことを尋ねたのである。
「それ聞きたいけれど」

「ああ、それね」

「何で麦飯なのかな」

「長芋あるから」

だからだとこいつのだ。

「それをかけて食べるから麦飯にしたのよ」

「ああ、お芋あるんだ」

「すつたけれど食べる？」

「卵？味噌？どっち？」

「御味噌よ」

それで長芋に味をつけたといつのだ。

「それ食べるわよね」

「うん、じゃあ」

すぐにだ。彼も頷いて言ひ。

「それ貰うよ」

「じゃあね。冷蔵庫にあるから」

「あるなら早く言ってよ」

「御免なさい、忘れてたのよ」

「全く。ところで父ちゃんは？」

「自分の部屋でゲームしてるわ」

自分にとつて夫にあたるその彼はそつしていふところなのだ。

「ドリゴンクエストしてるわよ」

「ああ、あれね」

「今シナリオ4だつたわね」

それだというのだ。

「それやってるわ」

「お父さん4好きだよね」

「何だかんだであれが一番みたいよ」

「それでファイナルファンタジーは6で」

そのゲームはそれだというのだ。

「随分やり込んでるね」

「それでお母さんはね」

母はどうかじだ。我が子に笑顔で話す。

第一話 水の少年その十三

「ウイザードリイだけれど」

「あれねえ」

「外伝の4やつてるのよ」

「ああ、あの最後の方の敵がとんでもなく強いあれだね
そんな話をしてだつた。彼はその夕食を食べてだ。
そのうえでだ。彼は今度はだ。庭に出ようとした。

「じゃあちょっとね」

「素振りするの」

「うん、そうするけれど」

「ちょっと待ちなさい」

ここにだ。母は彼を呼び止めるのだった。

「今は駄目よ」

「駄目って?」

「食べてすぐじゃない」

だからだとこうのである。

「だからね」

「ああ、少し休めってことだね」

「そういうこと。簡単な運動でもね」

「食べてすぐは駄目なんだね」

「身体によくないから」

こう我が家子に話すのである。

「まあ少し休んでいなさい」

「わかったよ。じゃあね」

こう言ってだ。彼は自分の部屋に入るのだった。そしてだ。
部屋で少し勉強してからだ。それから庭で素振りをした。
その次の日だ。新聞にはだ。

一人の元教師が逮捕されたとの記事があつた。それを見てだ。

上城は両親にだ。こんなことを言つた。

「学校の先生つてさ」

「学校の先生がどうしたの?」

「それで」

両親も彼と共に朝食を食べている。白い御飯に納豆をかけて食べる。それと葱の味噌汁に玉子焼きだ。そうしたもの食べながらだ。彼はだ。両親に話すのだった。

「結構おかしな人がいるんだね」

「そうかしら」

「別にそうは思わないけれどな」

父の顔は我が子によく似ている。むしろ息子が父親似だった。その父がだ。納豆飯を食べながら我が子に応える。

「そういう人もいるつていうことだろ」「それだけかな」

「世の中おかしな人は絶対にいるからな」

父こうも話す。

「だから学校の先生にもな」

「いるんだ」

「ああ、そうしたおかしな人がな」

「それだけかな」

「ただしな」

「ここでだ。父の口調が変わった。

「学校の先生つてのはストレスが溜まるしな」

「大変な仕事だからね」

母も言つ。味噌汁をすすりながら。

「授業のことによく生徒のことに学校のこと

「生徒の親もいるからな」

考えるべきことは多い。それでなのだった。

「何かつてあるからな」

「だから。ストレス溜まつてね」

「おかしくなるのかな」

「そういう人は多くなるな」

「父はこう息子に話す。

「あと。日教組って組織もあって」

「ああ、あれね」

「あの組織の系列の先生は元々おかしいな」

「このことは最近まで広くは知られていなかった。日教組がどういつた異常な組織かをだ。ネットが普及するまで知られていなかったんだあ。

「あそこはな」

「あの組織はね」

「母も日教組について話す。

「日本で一番変な組織だから」

「そんなにおかしいの?」

「だって。教育の理想がね
どうなのかなとだ。我が子に話すのだった。

第一話 水の少年その十四

「北朝鮮なのよ」

北朝鮮にてある「

卷之三

言わすと知れた究極の独裁国家たる共産主義というか世襲でありしかも一人の人間だけが贅を極めている。そうした国であるのも最近まで広く知られていなかつた。

「北朝鮮が理想つて」

おかしくなし筈がなしでしょ

「ル・リ・セ・ム・セ・ル」

「僕でもね」

この遡す上坂たつた

「國史」

父は顔を顰めさせて我が子に話す。

理想としていたならな

「御覽」の「御」は、この「御」の「御」である。

父もそれは確かと言つ。

したしか
それでモナ

「三教祖がある」など

どうしてもだ。そうなるというのだ。

二二九

その記事を見てだ。また言う彼だった。

「そういう人なんだね」

「あれ? ひょっとして」

母がまた話に加わってきた。

「何か暴力教師が通り魔やるうとして逮捕されたって
うん、それ」

まさにそれだと答える。母に対して。

「本当にその人だから」

「何か中学校の先生だったわよね」

「知ってるんだ」

「夜のニュースで見たから」

それで知ったというのだ。その元教師のことを。

「酷い先生もいるものだつてね」

「うん、本当にね」

上城は自分がその教師に会つたことはあえて隠して応える。

「それはね」

「生徒に普通に暴力振るつて一切お咎めなしだつたなんて」

「通報されるまではそうだつたみたいだよね」

「それ自体がおかしいわよ」

母は自分のテーブルのところで首を捻る。

「そう思うと。あんたの通つてる学校は」

「小学校から。そんなことはなかつたから」

「幸せだつたわよね」

「どうかそんな先生がいること自体が」「信じられないの?」

「普通の社会でそうした人つて存在できるの?」

「こう両親に問うとだ。その答えは。」

「そんな筈ないだろ」

「絶対に問題になるわよ」

「こうだつた。当然の答えだつた。」

「そんな人間普通にクビだぞ」

「警察来ない筈がないから」

「そうだよね。幾ら何でもね」

「それで問題にならない方がおかしい」

「それまで問題にならなかつたのがね」

「これが普通の社会である。教師の世界の方がおかしいのだ。」

「それでだつた。一人はまた我が子に話した。

「いいか、そういう人間には絶対にな」

「なつたら駄目よ」

「そうした人間は教師じやない、反面教師だ」

「真似をしたらいけない人だから」

「そりなんだね。普通の世界じや」

「どうしてもそりなることだつた。そんな話をしてだ。

第一話 水の少年その十五

上城は朝食を食べ終えて。それからだつた。

「じゃあ。今からね」

「歯は磨いていきなさいよ」

「うん、わかつてゐるよ」

「こう母に忘えながら席を立ち食器を洗い場に置いてだつた。
そのうえで歯を磨きに行きだつた。

「今からね」

「行つてらつしゃい」

「車に氣をつけてな」

両親がこう言つて我が子を送る。そしてだ。
母は夫である相手にもだ。いつも告げた。

「あなたもね」

「おつと、そくだな」

「そうよ。食べて歯を磨いてね」

「それで会社に行かないとな」

「そう。それからね」

「歯は磨かないとな」

「そう、まずは歯が大事よ」

健康管理はそこからだとこいつのだ。

「だからね」

「食べたら絶対に歯を磨くのか

「食べた後が一番汚いから」

それを磨いて。それからだといつのだ。

「お口の中は奇麗にしないとね」

「そうだな。けれどな

「けれど?」

「磨き過ぎても駄目だからな」

それもだとだ。彼は自分の妻に笑いながら話した。

「そこも気をつけないとな」

「勿論よ。それもね」

それはわかつていいとこだ。

「けれどね」

「奇麗にするのは」

「それは忘れないことよ」

このことはだ。ぐれぐれもとこだ。

「わかつてくれるかしら」

「わかつてるや。じゃあな」

こうした話をしてであつた。

彼は朝の団欒から学校に向かうのだった。彼の運命はまだ動いてはいなかつた。それを知つてゐる者も。今はここにはいなかつた。

第一話 完

第一話 銀髪の美女その一

久遠の神話

第一話 銀髪の美女

登校した上城にだ。クラスメイト達が声をかける。

「おい、聞いたか」

「昨日凄いことがあつたんだよ」

「昨日つて？」

それを聞いてだ。彼もふと目を動かした。

そのうえでだ。こう彼等に尋ねた。

「昨日何があつたの？」

「何かな、急に道の木が燃えてな」

「真夜中にな」

「真夜中に木が？」

それを聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。

そしてそのうえでだ。彼等にまた尋ね返した。

「放火とか？」

「そうみたいだな。おかしな放火魔だよな」

「家じやなくて木を狙うなんてな」

「おかしいだろ」

「おかしいね」

実際にそうだとだ。彼も言った。

「つていうか真夜中になんだ」

「朝通勤の人気が見て騒ぎになつたんだよ」

「それまであつた木が急に燃えててな」

「しかも何本もな」

「聞けば聞く程おかしな話だね」

「また言う上城だった。」

「一体誰がやつたんだろうね」

「なつ、おかしいだろ?」

「変な放火魔もいるよな」

「しかもどうやって燃やしたのかもまだわかつてないんだよ
ライターなりマッチなり。そして油や火薬さえもわかつていないと
いうのだ。

「本当に自然に燃えたって感じでな」

「こんな放火ってないらしいんだよ」

「そうだね。普通はないね」

それはその通りだとだ。言わずともだつた。

「そんなのつて」

「おかしな事件だよ」

「そんな話もあるしな」

「後な」

ここで話が変わつた。その話は。

「大学に凄い奇麗な人がいるぜ」

「うなんだ」

その話にはだつた。上城は今一つの反応を見せた。

「まあいるよね。そういう人も」

「おい、反応薄いな」

「彼女いるからかよ」

「勝ち組の余裕かよ」

周りがそんな彼にやつかみ半分で言つ。

「やっぱり花持つてると花の話聞いても余裕だな」

「いいね、この」

「羨ましい奴だよ」

「ま、まあそれはね」

そのやつかみの言葉にだ。上城自身もはにかんでしまつた。それ
からだ。

彼にだ。最初に話を出したそのクラスメイトがこう話した。

「それでその美人さんな

「ああ、大学の」

「どういう人なんだよ」

「ギリシアからの留学生なんだよ」

「まずは国籍から話される。」

「そこから来た人でな」

「ああ、ギリシアっていつと」

「あの神話で有名な国だよな」

「オリンピックとかな」

「あの国だよな」

皆、ギリシアについての話をはじめた。その話からだつた。

「あの国からの人なんだ」

「じゃあ外人さんか」

「だよな、絶対に」

「ああ。銀髪で目が緑色でな」

次は外見的な特徴から話される。

第一話 銀髪の美女その一

「それが凄く目立つてな」「とにかく奇麗な人か」「そうなんだな」「ああ、俺も一回見たけれどな」
「その人をだというのだ。
「モデルみたいに背が高くてすらりとしててな
「おいおい、モデルかよ」
「さらに凄いじゃねえかよ」
「とにかく一度見たら忘れられない位だよ」
「そうした話を聞いてであつた。周りも。
羨ましい顔になつてだ。それで言つのだつた。
「一回見てみたいよな」
「そんなに奇麗な人だとな」
「大学に行くか」
「そこでな」
「部活は弓道だつてさ」
彼はその部活のことも話した。
「アーチェリーもやつてたかな」
「どつちにしても弓か」
「弓と弓掛け持ちしてんだな、その人」
「弓好きなんだな」
「そうみたいだな」
実際にそうだとその彼も話す。
「けれど他のスポーツもな」
「できるつていうんだ」
「スポーツ万能なんだな」
「つまりあれか」

ここでクラスメイトの一人が言った。

「スポーツ万能の美人の留学生のお姉さんか」

「一言で言えばそうだよな」

「そういう人だよな」

他の面々もそれで納得する。

「ふうん、そういう人がか」

「大学にいるのか」

「交際できたらいいな」

一人がこんなことを言った。

「俺丁度フリーだしな」

「馬鹿、そんなポイント高い人が御前の彼女になるかよ」

「贅沢言うなよ」

それはすぐに周りに否定された。

「まあとにかく。大学にてゝやつてる留学生の人か」

「その人なんだな」

「髪は銀色で目が緑で」

「モデルみたいな人か」

皆それぞれ言つてくる。そしてだつた。

その話をしてだ。それは上城の耳にも入つた。

その話をだ。昼にだ。

小柄で黒髪をロングにした垂れ目の女の子にだ。話すのだつた。二人は今食堂で二人用の席に向かい合つて座つて食べている。そうしながらだ。上城はその女の子、八条学園の制服の一つである。青いブレザーと赤いタートンショックのミニスカートと赤いネクタイの彼女にだ。きつねうどんを食べながら話した。

「そういう人がいるらしいんだ」

「ああ、その人ならね」

女の子もだ。すぐに彼に応えてきた。彼女はざるそばを食べている。

「知ってるわ」

「えつ、樹里ちゃん知ってるの」

「ええ、私新聞部じゃない」

「それでなんだ」

「そうよ。新聞部だから」

それで情報を得ているとだ。彼女村山樹里は話すのだった。

「聞いてたわ」

「それでなんだ」

「ギリシアから来た留学生の人よね」

「そうちらしいね」

「それで髪は銀色で」

樹里はこのことと言つてきた。

「田は縁よね」

「そうそう、そう聞いてるよ」

「あとは『』得意で

「背も高いらしいね

「聞いてるわ。その人のこと」

実際にそうだとだ。樹里はざらのそばをすすりながら上城に話す。

「銀月聰美さんね」

「銀月つて」

その名前を聞いてだ。上城は眉を顰めさせた。

第一話 銀髪の美女その三

それでだ。きつねうどんの揚げを食べながら樹里に話した。

「それって変わった名前だけれど」

「それでもつていうのね」

「日本人の名前だよね」

「何でもハーフらしいのよ」

「ハーフ？」

「国籍はギリシアだけれど日本人の血を引いていて
それでだというのだ。」

「その関係でね。お父さんかお母さんのお家もあって
それで日本の名前なんだ」

「そうみたいよ」

「こう上城に話すのだった。」

「それがその留学生の人らしいわ」

「成程、そうなんだ」

「それがその銀月さんって人なのよ」

「銀月さんね」

「一度御会いしてみる？」

樹里は自分から上城に言った。

「今日にでも」

「今日にでもつて」

「そう。興味あるのよね」

「僕は別に」

「私があるから」

樹里はいささか強引にこう上城に話した。

「だから来て」

「そうなるんだ」

「取材も兼ねて」

半分以上理由付けだがそれでもだというのだ。

「一緒に来て」

「話変わつてない?」

「けれどいいじゃない」

話の強引さが強くなつていた。

「上城君も興味あるんだし」

「僕は別に」

「興味があるから話すんじやない」

「だからだつていうんだ」

「そう。じゃあ今日の放課後ね」

「部活の前にね」

こうして話は樹里のペースで決まつたのだった。そしてだ。樹里は今度はだ。こんなことを言つてきた。

「あとね」

「あと?」

「銀色の髪つて」

そうだ。銀髪について話すのだった。
「白髪とかそういうのじゃないわよね」

「違つみたいだよ」

「歳を取つたみたいなのじやなくて」

「そう、そのままのね」

「銀髪なの」

「ちょっと想像できない?」

「実は」

そうだとだ。樹里は首を傾げさせながら言つのだった。

そのうえでだ。やるそばと一緒に注文した天丼を食べてからだつた。上城に話す。尚上城は上城で親子丼も一緒に食べている。

「銀髪つてはじめて見るのよね」

「地毛のはだね」

「そうなのよ。地毛の銀髪つて

「日本人にはいないからね」「そうでしょ。白人の人でも

どうかというのだ。

「見たことないのよ」

「プラチナブロンドつていつたんだっけ」

「金髪よりも珍しいのね」

「金髪の人は多いじゃない」

特にゲルマン系に多い。ゲルマンといえば金髪に碧眼であるという認識は上城だけでなく樹里にもわりかし強く存在している。

「だから別に」

「珍しくないけれど」

「銀髪はね」

「確かに。言わせてみれば

話をしていくうちにこだ。上城も思つようになつた。

第一話 銀髪の美女その四

それでだ。こう彼女に話した。

「僕も銀髪の人は」

「あまり見たことないのね」

「テレビでもね。白い髪の人はいたけれど」

「あつ、昔のアメリカ大統領でいたわよね」

「クリントンだつたつけ」

「そう、あの人」

民主党の大統領であつた。女性問題で有名だがアメリカ経済を立て直したことでの功績があつた。彼の髪は白い髪だったのである。

「あの人髪は白だつたわよね」

「だよね。白い髪は見たことあるけれど」

「銀髪は」

「ないよね」

「実際のところね」

「そうだとだ。一人で話すのだった。」

「そしてだ。樹里はさらに話していく。」

「まあ縁の目はね」

「それは普通にあるよね」

「あつちの人じや多いわよね」

「結構ね。多いよ」

「何はともあれどんな人か」

「御会いしたいんだね」

「取材でね」

「あくまでそれを理由としての話だからいついつのだった。」

「行くわよ」

「それじゃあ僕もだね」

「ボディーガードで来て」

「やれやれだね」

こうした話をしてだつた。上城は樹里のお供で剣道部の前に新聞部の取材、名田上はそなつてゐるに付き合つてだ。大学に向かうのだった。

八条大学は高等部のすぐ隣にある。キャンバスの面積は大学の方が圧倒的に広い。大学の方が広いのは当然と言えば当然である。

その大学に入つてだ。樹里はまずこう言つのだつた。

「やっぱりあれよね」

「やつぱりって？」

「この大学つて広いわよね」

こう上城に言つのである。キャンバスは木々も多くまるで森の中に大学がある様である。その中を通りながら話をしているのである。

「下手したら迷いそうよね」

「実際道に迷うかもね」

その可能性は否定しない彼だつた。

「これだけ広いと」

「そうよね、ここは」

「高校の何倍あるかな」

「ええと、学部が幾つあつたかしら」

「三十はあつたんじゃないの？」

「三十つて」

まずその数にだ。絶句する樹里だつた。
それでだ。呆れた様にこう言つのだつた。

「普通五つか六つよね。大学の学部つて」

「こここの大学つて総合大学だからね」

「それでも三十つてかなり多いわよ

「いや、三十以上あつたかな」

上城はこんなことも言つた。

「とにかく何十もあるから」

「三十よりもだなの」

「あつたんじゃないかな。日本で一番学部と生徒数の多い大学らしいから」

「キャンバスの面積もよね」

「そう、全部ね」

とにかくだ。異様に広くて大きいマンモス校なのだ。尚彼等の通う高等部にしても高校としては相当な大きさの学校である。一こちらの生徒数も高校としては日本一なのだ。

その学園の中にしてだ。樹里は言うのである。

「広い学校もこうした時は」

「困るんだ」

「かなりね」

「そうだと上城に不平を漏らす。

第一話 銀髪の美女その五

「本当に迷いそうよ」
「大丈夫だよ」
だが彼は笑顔でこう彼女に返した。
「それもね」
「大丈夫なの？」
「大学のことは知ってるし」
「だからだと」
「大学によく行くの？」
「何処に何があるのかね」
「大学によく行くの？」
「部活のランニングコースだから」
「ああ、それでなの」
「ああ、それでね」
「そう、それでね」
道は知っているというのだ。
「広いからね。ランニングコースに向いてるから」
「だから知ってるの」
「そう。大学のことは結構詳しいよ」
「じゃあ道案内お願いできる？」
「だから行つたんだけれど」
「わかつたわ。それじゃあ」
「それで行く場所は？」
上城が尋ねるとだ。樹里はすぐにこゝだと答えた。
「弓道部の道場よ」
「そこにいるんだ」
「それがアーチェリー部の練習場か」
「あつ、隣同士だよその二つの場所つて」
「隣同士なの」
「そう、だからどちらに行くにしてもね」

「どうかというのだ。

「そのどっちにもね

「行けるのね」

「そう、行けるから

「便利だというのだ。

「じゃあどっちにしてもその銀月さんはそこにはいるから」

「行きましょう

「こうした話をしてだつた。二人は。

まずはその弓道場に向かつた。そこに行くと。

的に向かつてだ。白い上着に濃紺の男女が弓を次々に放っていた。床は和風の木のものでありそこからだ。狙いを定めて放っていた。

それを見てだ。樹里はまずこいつ言った。

「弓道の服つて

「稽古着だね」

「あれつて剣道のとはまた違うのね」

「うん、違うよ」

その通りだとだ。上城も答える。

「剣道着は『道のよりも厚いんだ』

「生地が違うのね」

「うん。ただ剣道着も白はあるけれどね

「女の子が着るあれね」

「そうだよ。ただ弓道も」

見ればだ。上下共に濃紺の者もいた。それは。

「男の人はそうだよね」

「紺色の人もいるわね」

「まあ。最近は柔道着も色のがあるし」
所謂カラーの柔道着だ。国際試合等で着る。

「こうしたところは寛容になつてゐるね」

「何か女人でも紺色の人いるわね」

「そうだよね。とにかくね」

「ここにいるのかしら」

樹里は首を捻りながら周囲を見回して話した。

「その銀月さんは

「髪の毛が銀色だったよね

「そう。それもかなり奇麗な」

「そうした髪の毛だというのだ。

「そうした髪だつていうけれど

「じゃあすぐにわかるよね」

「何処にいるのかしら」

樹里はまた周囲を見回す。その中でだ。

樹里はだ。その彼女を見つけたのだった。

「あっ」

「いたの？」

「あの人じゃないの？」

上城は道場に入つて来た白い上着と袴のその人を見て樹里に話した。

第一話 銀髪の美女その六

「ほら、髪の毛の色が」「
「そうね。あの人ね」「見ればだ。まさに彼女だった。
見事な銀髪を後ろで束ねている。そして目は緑色だ。
モデルの様な長身ではつきりした顔立ちだ。その彼女を見てだ。
彼は樹里に言うのだ。
「銀髪でしかも」「
「目が緑色で」「
「モデルさんみたいな美人なんだよね」「
「しかも弓道部にいて」「
「全部当てはまるじゃない」「
こう彼女に話す。
「そうだよね」「
「ええ、間違いないわね」「
樹里もだ。確信して言つのだった。
「あの人よ」「
「じゃあ今から取材?」「
「八条大学弓道部に突如として現れたホープ」
タイトルは今適当に考えたものだ。
「その人に今からね」「
「突撃取材だね」「
「ええ、行くわよ」「
「それじゃあ聞くよ」「
その樹里にだ。上城は問うた。
「紙とかレポート用紙は?」「
「持つてない筈がないじゃない」「
返答は即答だった。

「それは」

「ああ、持つてるんだ」

「当たり前でしょ。新聞部よ」

だからだとだ。樹里はいわさか胸を張つて言ひ。小柄な彼女が胸を張るがそれでもだつた。背の高い上城からはつむじが見えてしまつた。

そのつむじを後ろから見ながらだ。彼は言ひ。

「持つているんだ」

「だから。持つてない筈ないじゃない」

「てつくり。理由付けだつて思つてたよ」

その銀髪の留学生に会う為のだといふのだ。

「違つたんだ」

「ま、まあね」

その問にはだつた。樹里は胸を反らすのを止めて。そのうえで視線を右に流して。後ろの上城に答えた。

「それはないから」

「だつたらいいけれど」

「何度も言つけれど私は潔白よ」

「ここで潔白つて言葉は使うのかな」

「使つわよ。いつのま」

「使つわよ。いつのま」

用途による言葉だつた。ただし口で潔白と言つ場合に潔白だつた事は少ない。だがそれでもあえて言つのが今の樹里だつた。いつも言い張つてからだ。彼女はあらためて彼に告げた。

「じゃあ行きましょう」

「うん、話長くかかつたけれどね」

「それは気のせいよ」

「気のせいかな」

「そうよ、気のせいよ」

「とにかくね」
樹里はここでも強引だつた。

「うん、あの人に取材だね」

「そういうことよ」

「こう話してだった。彼等は。

その銀髪の美女のところに行きだ。声をかけたのだった。

「あの、すいません」

「高等部の者ですけれど」

まずは樹里が、そして上城がだった。

一人でだ。彼女に声をかけた。だが、だった。

樹里は最初に上城を見てだ。こう言ったのだった。

「貴方もなのですね」

「はい？」

そう言われてだった。彼は。

第一話 銀髪の美女その七

田を丸くさせてだ。美女に返した。

「僕ですか？」

「貴方もまた剣を」

「剣をつて」

「そうですか。また」

「ひょっとして」

美女の話を聞いてだ。彼は言つのだつた。

「剣道部に入りしていますか？」

「剣道ですか」

「はい、実は僕高等部の剣道部なんです」

「このことを美女に話す。

「それで大学にも出入りしてますけれど」

「大学の」

「それで御存知だったんでしょうか」

「こうだ。美女に怪訝な顔で尋ねるのである。

「そうなんですか？」

「それは」

「とりあえず今は」

美女は言葉を止めた。その彼女にだ。
彼はだ。こう言つのだつた。

「取材に付き合つて来ました」

「はい、八条学園高等部新聞部です」

樹里が明るい声で美女にまた声をかける。
「宜しく御願いしますね」

「こちらこそ」

美女は樹里の言葉に微笑みだ。そうしてだつた。
頭を深々と、日本のお辞儀をした。それからだ。

彼女にだ。」こう話した。

「ギリシアから来ました」

「留学生の方ですね」

樹里はこのことも名前も既に知っているがだ。あえて言わずに彼女の話を受けて話した。

「ギリシアからの」

「名前は」

美女は様式美の如くだ。今度はこう話した。

「銀月聰美といいます」

「日本のお名前ですね」

「父が日本人ですから」

「それで日本のお名前なんですか」

「そうです。ですが国籍はギリシアです」

この辺りはやや複雑だった。名前は日本のもので家族の一方も日本人であるがだ。国籍はギリシアにあるといつのである。それにだつた。

「ずっとあの国で育つてきました」

「ギリシア生まれのギリシア育ちでした」

美女、銀月聰美はまた話した。

「そうなんです」

「そうですか。ハーフで」

「それで」

「そうなります。日本に来たのは」

「それはどうしてですか?」

「勉強の為ですよね」

「いえ」

ところがだつた。

聰美は急に顔を曇らせてだ。こう答えたのである。

「止める為です」

「止める!?」

「止めるといいますと」

「あの方がこれ以上過ちを犯されるのを止める為に」「
そうだというのである。

「それで日本に」

「過ち！？」

「過ちつていいますと」

二人は彼女のその言葉に首を捻つてだ。
あらためてだ。こう彼女に尋ねたのだつた。

「何ですか、それ」

「妙な感じがしますけれど」

「あつ、いえ」

己の言葉を遮つてだ。聰美はこう一人に話した。

第一話 銀髪の美女その八

「言葉のあやです」

「あやですか」

ノルマニ

初対面の方がおられますとどうだといつのだ。そういう

「自然と氣を張り詰めてしまつて」

「それで、となるんですね」

「はい、すいません

第三回

「運氣に附されずには

樹里だけでなく上城も彼女を慰める様にして言う。

ニシノミヤガ 桜里

「あの、それでなのですから、

「それでとは？」

卷之三

「おじとをた
聰美に尋ねたのである

卷之三

「弓は好きなので

それでだ。聰美は樹里の問いに答えて話す。

「私は弓」のことはよく知りませんが

「」のことは断る樹里だった。

「ですが」「道とアーチェリーは細かいところが随分違うんですね」

「そうです。」「であることは同じですけれど」

「そのことについては違和感はありませんか？」

「」の聰美に尋ねるのだった。

「両者の違いには」

「」「は。どれであっても」「ですから」

これが今の樹里の問い合わせの聰美的返答だった。

「特に」

「ないんですか」

「」「はどうであっても得意です」

自信が見られる言葉だった。

「」「なら」

「そうですか。」「なら」

「はい、得意です」

また言つ聰美だった。

「持つているだけで幸せになれます」

「それはまたかなりですね」

「」を使つた狩もしていました

「狩もですか？」

「ギリシアにいた頃は」

していたというのだ。」「使つた狩を。

「それでよく山の中を駆けました」

「それはまた凄いですね」

狩もしていたというのを聞いてだ。樹里は田を丸くさせてだ。レポート用紙に素早く書きながらだ。聰美に言葉を返した。

「狩までされていたのですか」

「流石に日本ではしていませんが」

「日本ではですね」

「はい、それは」

していないといつのだ。

「ただ。陸上はです」

「あつ、御聞きしています」

陸上と聞いてだ。樹里はその顔をほつきつとしたものにさせた。
そのうえでだ。彼女にこう話す。

「陸上部にも入つておられるとか」

「駆けるのも好きなので」

また答える聰美だつた。そうした話を聞けば随分とスポーツに秀
でている留学生に聞こえる。少なくとも樹里も上城もそう思った。

「それで」

「アーチュリーと陸上で」

さらに言う樹里だつた。

「選手だつたそうですね」

「そうだつたこともありました」

「陸上の選手でもあつたんですか
それを聞いてだ。上城が言つ。

第一話 銀髪の美女その九

彼は聰美を見ながらだ。その彼女に話した。

「そういえばそんな感じですね」

「おわかりになられるのですか」 6

「何となくですが」

「わかるというのだ。」

「それでなんです」

「そうですか。実は私も」

「銀月さんも？」

「わかることがあります」

上城を見て。そのうえでの言葉だった。

「貴方のことについて」

「僕のことがですか」

「はい、わかることがあります」

「ううだ。その上城を見ながら話すのだ。

「貴方は剣道をされていますね」

「そうですけれど」

「この国の剣道をですね」

「はい、今もこれが終わってから」
「するというのだ。その剣道をだ。

「そのつもりです」

「そうですね。そしてです」

「そして?」

「そのことが

まだ彼を見てくる。そしてさりと話すのである。

「貴方を大きなことに導くでしょ?」

「剣道をしていることがありますか」

「もつと言えば剣道をしていること」

聰美はさりげなく言つ。

「そのこともまた」

「剣道をしていろ」とが

「運命ですか」

「剣道をしていることが運命なんですか」

「遙かな時代より」

「話は遡る。そこまでだ。

「それは決まっています」

「僕が剣道をしていることが?」

「貴方はこの時代のこの国でもまた」

聰美的顔が変わった。悲しむものに。

そしてその悲しむ顔で。さらに話す彼女だった。

「貴方は闘い続けるのですね」

「?さつきから何を言つてゐんですか?」

彼女のその話を聞いてだ。樹里は。

首を捻つてだ。こう聰美に尋ねた。

「あの、剣道とか運命とか

「あつ、それは」

「確かに上城君は剣道をしますけれど

それは間違いないといふのだ。確かだとだ。

「けれど。それに運命って

「よくわからないよね

「傍から聞いてもね」

そうだとだ。上城自身も言つ。

「よくわからないよね

「どうもね

「あつ、それは」

二人の話を聞いてだ。それでだつた。

「何でもないです」

「何でもないつて

「そうなんですか？」

「はい、何となくそう思つただけで
あくまでそれだけだというのだ。

「気にされないで下さい」

「ならないですけれど」

「そうよね」

「そうは聞いてもだつた。

「二人はどうもだ。わからないという顔になつてだ。
そのうえでだ。聰美にあらためて話す。

「妙に気になりますけれど」

「本当に何もないんですか」

「はい、ないです」

「そうだというのだ。

「特に別に」

「ならいいですけれど」

「それなら」

「二人も釈然としないがそれでもだつた。
聰美がそう言つのならいいとしてだ。頷くのだつた。

そんな話をしているうちに取材も終わつてだ。それでだつた。
一人は聰美と別れ大学から高等部に向かう。その中でだ。

第一話 銀髪の美女その十

樹里はいつも上城に話すのである。

「銀月さんだけれど」

「あの人だよね」

「変な」と言つてゐるわよね

「うん、かなりね」

そうだとだ。上城は樹里のその言葉に頷いた。
そのうえでだ。首を捻りながら話すのだつた。

「僕がや。何か」

「運命がつてね」

「この時代でもこの国でもつて」

「おかしな話よね

樹里も言つ。

「これつて」

「おかしなつてこいつか

「何か引っ掛かる?」

「そんな話だけれど」

「引っ掛けらつてこいつことは」

そのことはどうかとだ。樹里は上城に話す。

「思つところがあるからよね

「思つところつて」

「そう。何も思わなければ

どうかというのだ。その場合は。

「引っ掛けらんてことないじゃない

「聞いてすぐにでも忘れるかな

「そう。もう簡単にね

「さうなるといふのだ。

「だから。引っ掛けらるのは

「何か思うところがあるから」「何で思うかまではわからないけれど」

「それでも僕は思ってるんだ」「心の何処かでね

「何かそれって」

「どうかとだ。上城はここで言った。

「余計におかしな話だよね」

「そうよね。私もそう思うわ」

「おかしな話だつていうんだね」

「それもかなりね」

「そうだというのだ。」

「また随分と」

「運命ねえ」

「それと剣道よね」

「ひょっとして」

「首を捻りながら。上城はこう話した。

「あれかな。僕の前世がさ

「前世ね」

「剣術家か何かで

「それでだ。どうかといふのだ。」

「そのせいで。今何かあるのかな」

「何か話がSFめいてきたわね」

「そうだね。こう考えると」

「完全にSFじゃない。それかファンタジー」

「それであれかな」

「上城はいささか調子に乗った感じでだ。樹里に話す。

「僕は運命の剣士だつていうのかな」

「それで何かを果たすとかね」

「そんな面白い話かな」

「だったら面白い?」

「いや、実際にそんなことになつたら」「どうかといふのだ。その場合は。

「結構鬱陶しいと思うけれど」

「運命に導かれて何かをするつてことは」「うん。それって鬱陶しい」とひと聲つよ

「そうね。考えてみれば

腕を組んで考える顔になつてだ。樹里も言つ。

「そうなるわよね」

「そうやつ。厄介なことだと思つよ」

「ましてやそれが命賭けのことだつたら」「余計にまずいわよね」

「そんなの絶対に嫌だよ」

上城は顔を顰めさせ苦笑いになつて述べた。

「もうね」

「そうよね。それはね」

「まあそんなことは絶対にないだりうけれど」

「漫画じやあるまこしね」

「そうだよね」

笑いながらさうした話をしてだつた。上城は剣道部の道場に向かう。そしてだ。

樹里は新聞部の部室に向かつた。一人はそれぞれの部活を楽しんだ。健全な高校生活を送るのだった。

第三話 見てしまったものー

久遠の神話

第三話 見てしまったもの

上城の学園生活は変わらない。そのままだった。

部活でもだ。平和だった。

今日は部活でランニングだ。その休憩時間にだ。
スポーツドリンクを飲みながらだ。部活仲間の話を聞いていた。

「うちの部活つてあれだよな」

「ああ、走つてばかりだよな」

「ランニングとか。筋力トレーニングとかな」

「素振りよりそっちの方が多いよな」

「絶対にな」

「まずは体力だ」

ここでだ。その剣道部の顧問の先生が来て彼等に話す。

「だから走るんだ」

「いつもそう言つてますよね」

「だからだつて」

「そうだ。稽古はそれからでいい」

そうしたものは一番田だとこうのだ。

「まずは走ることだ。部活だしな」

「部活だからですか」

「走るんですか」

「それからなんですか」

「そう、部活は楽しんで心身を鍛える為にあるものなんだ
腕を組んでだ。顧問の先生は確かに話す。

「だからだ。走るんだ」

「じゃあ勝つ為に稽古ばかりしてるのは」

「そういう教師もいるな」

先生も話す。

「そういう教師はだ」

「間違いですか」

「やっぱりそうなんですね」

「そうだ、そうした教師が考へて『いるのは』何かというとだ。それは、

「自分の成績をあげることだけだ」

「部活ですか？」

「それですか？」

「そう、それだ」

「そのことを話すのだった。

「部活で実績をあげても得点になる」

「教師ですか」

「得点になるんですか」

「そう、なる」

「また話す先生だった。

「それで生徒のことを考えずに『うした稽古ばかりさせれる』

「何か嫌な話ですね」

「そんな教師もいるんですね」

「上城達もここで知ることだった。

「つていうか教師に成績があるんですか」

「そうしたのがあるんですか」

「ある。そしてだ」

「さらにだつた。

「そうした教師は生徒が試合に負けると」

「教師の成績に関わる試合がですか」

「それに負けたらですか」

「生徒にハツ当たりをする」

「こうした教師が実際にいるのが我が国の教育界だ。それだけ歪み腐りきつているのだ。残念なことにそうした教師も多いのだ。

「虐待にもつながる」

「虐待、ですか」

「そんなこととして許されるんですね」

「それが教師の世界なんですね」

「残念なことにな」

まさにその通りだといつのだ。

「その教師が前に大学でやられたあの教師だ」「あいつだつたんですか」

「その話を聞いてだ。上城は驚きの声をあげた。
そしてそのうえでだ。顧問の先生に言つた。

「あの中学校の」

「あいつのことは知つていた」

顧問の先生は不機嫌そのものの顔で話す。

「中学生相手に突きをして罵倒の限りを極めていた」

「そうらしいですね」

「中学生に突きつて」

「竹刀を蹴飛ばし床で背負い投げをしていた」

「そうしたことも知つている先生だった。」

「最低の人間だった」

「ですよね。そこまでするつて頭おかしいでしょ」

「相手まだ子供じゃないですか」

「中学生ならだ。」こう言つてもよかつた。

第三話 見てしまったものその一

「ついこの前までランドセル背負っていた子供相手にですか」「そんなことしてたんですか」
「俺が成敗しようかと思っていた」
顧問の先生もだ。そう考えていたというのだ。
「だがその前にだ」
「大学でやつつけられたんですね」
「悪事も暴かれて」
「それで今は剣道界にもいない」
追放されたというのだ。
「もう竹刀を握れないどころか身体を動かせないようにもなった」「当たり前ですよね、それって」
「当然の報いですね」
「比良屋経市楼といつたな」
その教師の名前も話される。
「その教師がですね」
「それでその教師がですね」
「再起不能になつたんですね」
「それで今度刑務所に入ることになつた」
まさに最高の因果応報の流れだった。
「いいことだ」
「ですね。本当に」
「というかそんなのが教師で剣道教えてたつて」
「とんでもないことなんじや」
「そうだ。とんでもないことだった」
まさにそうだとだ。先生も話す。
「しかしそれもあらためられた」
「あの大学生の人つていふことしたんですね」

「ですよね」

「成敗されなければならぬ悪もある」

時代劇の様な話だ。しかしこれも現実だった。

「そういうことだ」

「ですね。本当に」

「その通りですよ」

「それで俺はだ」

先生はここで話を変えた。

「御前等は走らせる」

「まずは体力ですね」

「そこからですね」

「そうだ。とにかく走れ」

「走るんですね」

「まずは」

「そうだ。何?」とも走つてからだ

先生の言葉は変わらない。

「ただしだ」

「ただし?」

「ただしつていいますと」

「兎跳びはさせないからな」

それは絶対だというのだ。

「あの中学の教師はさせていたそうだがな」

「あの、兎跳びって」

「あれまずいでしょ」

「そうでしょ」

兎跳びと聞いてだ。上城達もだ。

顔を顰めさせてだ。それぞれ言つた。

「あれは足腰痛めるんですよね」

「特に膝を」

「そんなのどうくの昔にわかつません?」

「それをさせていたつて」

「その教師何だつたんですか？」

「馬鹿だ」

先生の言葉は鞭になっていた。

「そんなこともわからない体育教師だった」「体育教師こそ一番わかることなんじゃ？」

「だよな。そういうのって」

「身体を動かして扱うことを教えるんだから」「それがまずわからないって」

「知らないにしても」

「そこまでの馬鹿でも先生になれるんだな」「そしてこの結論が出たのだった。

第三話 見てしまったものその三

「世の中って凄いよね
つていうか有り得ない?」
「普通の世界じゃ絶対に通用しないよな、そんな馬鹿
それで生徒を教えてるつて
「世の中怖いよね」
「世の中色々な人間がいる」
「そうだと。また話す先生だった。
「教師も色々だ」
「そうしたおかしな先生もいるんですね」
「つまりは
「他の仕事でもだ」
先生はまた話した。
「俺も剣道をしていてわかつたことだがな」
「色々な仕事の人がそれぞれ剣道をしていてですか
「それでわかつたんですね」
「そうだ。わかつた」
それを通じてだというのだ。
「色々な仕事で色々な人間がいる」
「どの仕事でもとんでもない奴はいるんですね」
「剣道をしている人間でもですね
「いるんですね」
「逆もあるがな」
「素晴らしい人間もいるというのだ。中には。
「しかしそうした人間に出会えればだ」
「そうした時はどうすればいいんですか?」
「俺そんな人間に剣道教わりたくないですけれど
「僕もですよ」

「そうだよな。そんな人間が教える立場だと何していくか」

「それこそわからないから」

「そうした人間は避けろ」

「これが先生が彼等に言つことだつた。
近くにいれば碌なことにならない」

「だからですか」

「そうした人間つてわかればですか
もう逃げるべきなんですね」

「そんな奴からは」

「そんな人間に教えられても何にもならない」

「だからだともいうのだ。」

「教えられることは碌なことじゃない」

「それか身体壊すか」

「そうしたことですよね」

「大体わかる。おかしな人間は
こうも話す先生だつた。

「その行動でな」

「わかるんですか？そういうことも」

「おかしな人間だつてことも」

「そうしたしてはいけないことをする」

中学生に突きをしたり反則を取られる技を浴びせたり。あまりにも酷い罵倒や体罰をすることこそがだ。してはいけないことだとうのだ。

「だからだ。それはだ」

「そうしたことからわかるんですか」

「暴力からですか」

「そういったことからわかる」

「そなんんですね」

「その通りだ。その行動がおかしな教師には教わるな
先生は彼等に強く言う。

「絶対にだ」

「わかりました。そうします」

「さもないと危ないですよね」

「碌でもない人間には教わらない」

「そういうことですね」

「その通りだ。まともな人間かどうか見極めてだ
それでだというのだ。」

「その先生についた方がいい」

「あの、それじゃあですけれど」

「そういうことです」

「先生もそう思われたらですよ」

「俺達部活辞めますけれど」

「そうなつてもいいんですか？」

「その場合は」

「いい」

構わない。先生は毅然とした声で答えた。

第三話 見てしまったものの四

「そうなつてもだ」
「えつ、いいんですか！？」
「俺達が離れてもですか」
「それでもいいんですか」
「それは俺に問題があつたからなることだ」
先生は毅然としてだ。彼等に話した。
「だからだ。それでそくなつてもだ」
「構わないんですか」
「構わないんですね」
「そうだ。それならそれで仕方ない」
先生はまたこう言つた。
「俺はそう思つ」
「ううん、何か潔いつていうか」
「先生つてそうじやないといけないんですね」
「それで人間もそくなんですね」
「そうしたことを受け入れないといけないんですね」
「そういうことだ。自分が招いた禍は避けられない」
孟子にあることをだ。先生は強く意識しながら言葉として出した
のだ。
「それはもうな」
「ですか。そうなんですね」
「生徒が離れるのは顧問の先生にこそ問題があるから」
「だからですか」
「俺もだ」
「そんだ。先生にしてもだといつのだ。
「そんな教師には教わりたくない」
「そうした暴力教師にはですね」

「教わりたくないんですね」

「そうだ。絶対にな」

まさにそういうのだ。

「何があつてもな」

「ですね。それは誰でもですよね」

「正直何されるかわかりませんから」

「じゃあ俺達も気をつけます」

「そんな先生には」

「それでこうも思うな」

先生は話を変えてきた。

「そんな人間にはなりたくないと思うな

「ですん。そんな暴力的な人間にはとてもですよ」

「なりたくないですよ、それこそ」

「本当に何があつてもですよ」

「なりたくないです」

そのことについてもだ。彼等も答えた。

「何ていいますか。最低ですから」

「自分がやられて嫌ですし」

「自分がそんな人間になつたらですよ

「最低ですから」

「そういうことだ。自分がやられて嫌なことはまだ」

「まさにだ。そうしたことはだというのだ。」

「絶対に他人にはしない。そしてだ」

「自分がそうした嫌な人間にはですね」

「絶対になつたらいけない」

「そうですよね」

「そうだ。まああの教師はな」

中田に成敗されただ。その暴力教師はどうかといつのだ。

「いい反面教師だ」

「そうした教師なんですね」

「つまりは

「最悪の教師は最高の反面教師だ」

学校はそうした反面教師の宝庫でもある。これも日教組の影響だろうか。

「あんな人間になるものかと思わせるな」

「そうですね。じゃあ俺達そんな人間になりたくないですから」

「気をつけます」

「そうします」

「ああ、そうしてくれ」

先生もそのことを心から願うのだった。そのうえで上城達と共に走るのだった。部活は確かに体力を使うが確かなものだった。その部活の後でだ。

第三話 見てしまったものその五

上城の学校の帰りは今日もだつた。樹里と一緒にだ。
二人並んで楽しく話をしながらだ。下校の「デート」を行つていた。
その中でだ。樹里が彼に言つてきた。

「あの人だけれど」
「あの人つて？」
「だから。ギリシアからの留学生の人よ」
「ああ、銀月さん」
「そう、あの人ね」
「そうだ。彼女のことだつた。
「あの人についてどう思う？」
「どう思うつて」
「奇麗な人よね」
樹里が話すのはこのことからだつた。
「日本人離れ、いえ」
「いえ？」
「何か人間からランクがあがつたみたいな
「人間より上つて」
「女神みたいな感じだけれど」
「女神ね」
「そんな感じしない？あの人」
こう言うのである。
「何かね」
「言われてみれば」
「そうよね。人間離れした感じね」
「うん、凄く奇麗で」
「あと。中性的？」
こんなことも言つ樹里だつた。

「女人の人だけれど何処か
「そうそう、健康的でね
「スポーツをしてるせいかな
「そのせいかな
「身体つきが凄く引き締まつていて背も高くて」
樹里はここで隣にいる上城を見た。小柄なので見上げる形になつ
ている。

「上城君と同じ位だつたかしら」

「それ位かな
「ええと、上城君は確か
「一七ハだよ」

「それ位あるのだ。高い方と言つていい。
「今はね」

「じゃああの人つて」

「そうだね。一七五はあるよね
「女人の人としてはやつぱり」

「かなり高いよ」

「そうよね。私は一五一で」

彼女はそれ位だ。やはり小柄なのだ。
「何かそういうのを比べたら」
「全然違うつていうんだね」

「羨ましいわ」

ついついだ。本音も出してしまつ樹里だった。
「そこまで高いなんて」
「背が高いとなんだ」
「羨ましいわ」

その本音を次第に強く話していく。
「私もそれだけあればって」
「思うんだ」
「女の子も背を気にするのよ」

「えっ、そつなんだ」

「やっぱり高い方がいいわよ」

言葉は力説になっていた。

「モテルみたいにね」

「僕はそつは思わないけれど」

樹里のその話にだ。こう返す彼だった。

「特に。そんな」

「わからないのよ、それは」

「わからないって？」

「そりや男の子は誰でも背を気にするけれど」

「女の子もって」

「同じだから、それは」

まだ言つのである。

「とにかく。背はね

「背は？」

「あとハセンチは欲しいわ」

これが樹里の心からの言葉だった。

第三話 見てしまったものの六

「一六〇位はね」「別に今までいいんじゃないかな」「何でそう言えるのよ」「いや、小柄な女の子って可愛いからだからだといふのだ。」「それでね」「可愛いつて。小柄なのが?」「そう思つけれど違うかな」「小柄だと子供みたいじゃない」今度はこんなことを言ひ。「だから。本当に」「一六〇は欲しいんだ」「今だつてね」また上城を見上げる。何気に首を必死に上にあげてこむ。「あれよ。見上げるの辛いから」「それでなんだ」「そう。女の子も背が欲しいこの自分のことからだ。こう話すのである。「だから同じよ」「そういうものなんだね」「そういうことよ。それでね」「うん。それで」「あの人。あそこまで背が高いとやはり羨ましそうに話す樹里だつた。「あのスタイルもあつて」「女優になれるかな」「本人がなりたいって言えばなれるでしょ」

自然にだ。そうなるといふのだ。

「もうそれでね」

「何処かの事務所がスカウトして」

「そうなるんだ」

「何度も言つけれどそこまで奇麗じゃない」

銀髪に縁の目。、そしてその白い肌も思い出しての言葉だ。当然背も。

「まさに完璧超人よ」

「完璧って」

「どう、完璧じやない」

また言つ彼女だった。

「いや、羨ましいわよ」

「ううん、その銀月さんが

「そう、完璧じやない」

樹里の羨望の言葉が続く。

「私もねえ。あんな感じだつたらそれじゃ」

「芸能界デビュー？」

「そういうのは興味ないけれど」

実はだ。そうしたことは考えていないといふのだ。

「ただ。それでもね」

「羨ましいんだね」

「どうしてもそう思うわ」

この感情をだ。抱いてやまないといふのだ。

「まあ。私は私だけれど」

「そうだね。あの人はあの人で」

「私は私で」

「それでいいじやない」

これが上城の樹里への言葉だった。そして樹里も。上城のその言葉を聞いてだ。静かにだつた。頷いてだ。こう返した。

「そうよね」

「そうだよ。人は人でね」

「自分は自分よね」

「だから。特に変に意識することはね」

「ないわね」

「変に強く考えたらそれこそ」

「どうなるか。上城はそのことも話した。

「かえつてよくないから」

「嫉妬したりして」

「憧れるのはいいと思うよ」

上城はその感情は肯定した。プラスの考えはだ。

第三話 見てじまつたものやの七

だが憧れ、羨望と逆のだ。その感情についても話した。

「けれど嫉妬はね」

「誰かを妬むのは」

「誰でもあることだけれどよくなこと悪いよ」

こう樹里に話したのだ。

「それはね」

「そうよね。マイナスの感情はね」

「それはその人をよくしないから

だからだというのだ。

「僕も。誰かを嫉妬したりしてね」

「上城君が？」

「子供の頃そうした感情あつたから」

「そうだったの」

「それで妬んでひがんでね」

子供の頃の経験、些細なことで誰にでもあるようなどだった。

「ほら、友達が滅多にないカードを持つてて」

「ああ、カードゲームの」

「それが欲しくて欲しくて仕方なくてね」

「妬んでたんだ」

「向こうもそれを自慢して」

本当によくあることだった。子供の頃には。これがプラモモデルだつたりチョロQだつたりゲームソフトだつたりする。何にしろ人が持つていて自分が持っていないものを見て嫉妬する。そういうことだつた。

その時のことだ。彼は今樹里に話すのである。

「もうね。我慢できなくなつて」

「カードを盗もうとしたとか？」

「そうだつたんだ。気付いたらそここの家にいるやつがいるとして」

「それで」

「いや、偶然だつたんだ」

そういうことだ。その時のことを話していく。

「そこでそいつの家の犬が鳴いて」

「あつ、犬がなの」

「立ち止まって。自分がしようとしている」とに気が付いて上

そこで良心が僵いたといふのか 良心といふものは急に動くこと

中古の力

ニホンノイデラウフニ

ノルマニヤ

不當に介在する「」

「九月九日憶

ט' ט' ט' ט'

「二編」

卷之三

一ノ三ノ二ノ一ノ

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନାଳୀ ପରିଷଦ୍ୟ

「アーティスト」

卷之三

并二册之并二册之并二册之并二册之

アリバウド。アリバウド。

「藏書」

「ノルマ」

「ナニビ一童ぬま」

セーナの心事には、それがの感情だ。

「二二」翻訳のU/I

「そへまー」の

それらしいのね

「うん。憧れる人や存在には近付いたいよね
上を、そして前を見ての言葉だった。

「そうだよね」

「ええ。そうした人には

「だから。努力するから」

それによつてだ。どうなるかともいつのだ。

「いいと思うよ

「努力して。自分が高まつていいくから」

「僕もね」

「上城君も」

「そう思つてるよ

樹里の方を向いて話す。

第三話 見てしまったものの八

「それが大事だと思うけれど」

「そうね。じゃあ私も」

「そのままでいいよね」

「うん、そうね」

笑顔で上城に応えた。そしてだつた。
そんな話をして楽しく下校のデートを楽しんでいた。しかしだ。
急にだ。二人の前にだ。

突然青黒い煙が出て来て。そして。

翼を生やした女が出て來た。その女は。

獅子の身体を持つている。乳房は人間の女だがそうした姿だつた。
その姿の異形の女が出て來てだ。上城に対して言つてきたのだつた。

「水ね」

「水！？」

「水の剣士」

いつも彼に言うのだつた。

「出て來たのね」

「出て來たって何が」

「水も出て來たとなると」

だが、だつた。女は。

自分でだけで言葉を続けていく。そしてだつた。

「面白いわね」

いつも言つたのである。

「これはね」

「面白いって。だから何が

「相手にして」

「どうかというのだ。

「不足はないわね」

「これってまさか」「ここでだ。樹里がその女、翼を生やし獅子の身体のその女を見て言つた。

「あれよ。スフィンクスよ」

「スフィンクス?」

「そう、あれよ」

「こう彼に話すのである。

「そのままの姿じゃない」

「えつ、けれどスフィンクスつて」

上城は驚いた顔で樹里に応えた。

「あれじゃない。男の人の頭に」

「それでライオンの身体つていつのよね」

「そうじゃないの?」

「あれはエジプトのスフィンクスだから

また違うというのだ。

「またね。違うのよ」

「そうなんだ」

「ギリシアのスフィンクスはまた違うの」

「ううん、そうだったんだ」

「そうよ。ギリシアのスフィンクスは」

「今目の前にいる」

それなのかなとだ。上城は樹里に尋ねた。

「そうだったんだ」

「ほら、朝は四本で」

樹里は今度はこの話をはじめた。

「昼は一本で」

「夜は三本だよね」

「それで歩く生き物は何かつていう謎々だけれど」

「あれだつたんだ」

「そう、それを言つスフィンクスがね」

それがだといふのだ。

「今日の前にいる」

「このスフィンクスなんだ」

「そう。ギリシア神話のスフィンクスなのよ」
こう樹里は話す。その話を受けてだ。

上城はスフィンクス、その異形の女を見てだ。こゝ言つた。

「じゃあここでも？」

「悪いけれどそれはもうしないわ」

スフィンクスは剣呑な調子でそれは否定した。

「もうね」

「謎々はしないんだ」

「闘いよ」

それをするといふのだ。

「それをするわ」

「闘いつて」

「さあ、早く出しなさい」

上城を見据えて言い返す。

第二話 見てしまったものその九

「今からね」「出すつて何を」「剣よ」「ここでも一方的に話すスフィンクスだった。「それを出して。闘うのよ」「刀なんてないし」上城は剣と刀を同じものと解釈して話した。「あるいは木刀だけれど」「何かしら、それは」「つて木刀知らないんだ」スフィンクスの言葉に少し戸惑つて返した。「じゃあ竹刀も」「知らないわよ、そんのは」「やはりこう言うのだった。

「全くね」「けれど刀なんて」「背中の竹刀袋を見て言つ彼だった。
「持つてないし」「持つてないというのね」「そうだよ。真剣だよね」スフィンクスに対して問うた。

「そんのは」「そう。まだなのね」「今度はまだつて」「まだなら早く言つうのね」今度はこんなことを言つスフィンクスだった。「呆れたわ」

「呆れたって言われても」

「剣を持たない相手とは戦わない」

「スフィンクスはまた言った。

「それが決まりだから」「だから。決まりつて何なのさ」

「神の定めた決まりよ」

「神様！？」

「そう。夜を輝かせる神」

「その神が定めたことだといつのだ。」

「その神との約束だから」

「神様つていつたら」

「樹里はまた首を傾げさせながら話した。」

「ええと。このスフィンクスはギリシアのだから」「ギリシアを知ってるのね」

「一応はね」

「そうだとだ。樹里もスフィンクスに話す。」

「その神様になるけれど」

「とにかく。剣を持つていらないのなら」

「どうかと。また話すスフィンクスだった。」

「帰りなさい」

「何もしないんだ」

「私はね」

「彼女、スフィンクスはそうだといつのだ。」

「決まり。守る魔物も少ないけれど」

「魔物つて？」

「私達の呼び名よ。怪物だの妖怪だのもあるわね」

「それがなんだ」

「何とでも呼ぶといいわ。とにかくね」

「今はなんだ」

「そうよ。帰りなさい」

また言うその怪物だった。

「剣を持つた時にまた会いましょう。ただね

「ただ?」

「他言は無用よ

このことは釘を刺すのだった。

「わかっているわね。それに」

「貴女みたいな存在に会ったなんて

ここで言ったのはまた樹里だった。

第三話 見てしまったものその十

「言つても誰も信じないけれど」「そうでしょ。それよ」「けれどなのね」「そう。他言はしないことね」「若し言えばその時は」「容赦しないわ」

決まりがあつても、それでもだつた。「その場合に限つてね」「そうなんだ。じゃあ」「早く帰りなさい。何もしないわ」

スフィンクスは一人にこのことは確かに保障した。

「お家にね」「何か知らないけれどね」「助かつたみたいね」「上城と樹里はお互いの顔を見て話をした。

「結構話のわかる怪物みたいだし」「運がよかつたかしら」「ええ、貴方達運はいいわ」

それはその通りだとだ。スフィンクスは一人にこのことも話した。

「実際におかしな怪物達だとね」「僕達ここで」「剣を持っていなくても」「食べられていたわよ」「実際にだ。そうだというのだ。
「私達は人間も食べるから」「スフィンクスってそうだつたわね」

樹里はまたギリシア神話から話をした。

「謎々に答えられなかつた人を」「食べていつたわ」
「だから。それで」「他の怪物も同じよ。やはりね」「人をだ。餌食にするというのだ。
「剣を持つ者は特にね」「剣を持つ人間はなんだ」「まあ。そのうちわかるわ」
スフィンクスは上城、その彼を見てまた話した。
「そうしたことがね」「そのうちつて」「まあ。それじゃあ話は終わつたから」
魔物から話を打ち切つてだつた。そのうえで。
スフィンクスは姿を消した。煙の様に。そして後に残つたのは。
上城と樹里だつた。二人は顔を見合わせてだ。
そのうえでだ。お互に話すのだった。

「今つて」「夢じやないわよね」「そうだよね。どう考へても」「ちょっと確かめてみる？」

樹里は首を捻りながら二こんなことじも言つた。
「一回ね」「確かめるつてこいつ」「頬つぺた抓り合おう」「実際にはそじょうどこいつのだ。
「それでわかるわ」「そうだね。これで夢でなかつたひ」「痛いわ」「痛いわ」

それで目が醒めてだ。わかるとこいつのだ。
「だからそうしましょう」

「じゃあ」

「それじゃあ」

「ひつしてだつた。お互いに頬を指で抓み合つてだ。
そのうえで抓つてみた。すると。

「痛いよね」

「痛いわ」

「抓つてわかつたことだつた。お互いにだ。

「とくうとやつぱり」

「夢じやないのね」

「ひつん、他言は無用つて言つてたけれど」

「こんな話誰も信じないわよ

まさにそうだつた。あまりにも非現実過ぎてだ。
一人がわかるのはそのことだつた。それだけだつた。

第二話 見てしまったものその十一

首を捻りそのうえでだ。現実であることを確め合つた。

そしてだつた。一人でだ。

その場を去ろうとした。しかしだつた。

ここでだ。また出て来た者がいた。それは。

中田だつた。彼は上城の姿を見てだ。こう言つたのだつた。

「あれつ、あんた確か」

「あつ、貴方は」

「ああ、中田さ」

自分からだ。笑顔で言つ彼だつた。

「八条大学のな」

「そうですよね。剣道部の」

「何でここにいるんだい? デートかい?」

「ええ、まあ」

その通りだとだ。上城は事実を隠して応えた。

「そうですけれど」

「そうかい。デートもいいけれどな」

中田は上城のその話に特に何も思つといろなぐだ。それでだつた。

彼と樹里にだ。こう言つたのだ。

「あんたにそこのお嬢ちゃんもな」

「私もですか」

「そう、あんたもだよ」

樹里に対しても言つのだつた。

「夜道は何かと物騒だからな。早く帰れよ」

「そうですね。最近変な人が多いついでありますし」

「だからですね」

「ああ、だからな」

それでだとだ。中田は笑つて述べた。

そしてそのうえでだ。「なんことも言つたのだった。

「食われないようにな」

「いえ、流石にそれは」

「ないですよ」

二人は食べられるといふ言葉にはすぐに突つ込みを入れた。

「人が人を食うって」

「そういうのはちょっと」

「ないですよ」

「どう考へても」

「おつと、そうだな」

中田もだ。自分で言いはしたがそれはすぐに否定したのだった。

「人間は人間を食わないよな」

「確かにそうした話もありますけれど」

「それでもちよつと」

「現実的な話じゃないですよ」

「夢みたいな」

二人は無意識のうちに先程のスマインクスとの話を思い出しながら述べた。

「まるで化け物が出たみたいな」

「そんな話ですね」

「じゃあ化け物でいいな」

中田は屈託のない、如何にも裏がなさそうな笑みで返した。

「とにかくな。化け物に食われないようにな」

「早く帰る」

「そうするべきですね」

「ああ、そうしろ」

中田はまた一人に言った。

「早いうちにな」

「わかりました」

「確かに夜遅くはいけないですし」

真面目な二人も頷いてだ。それでだつた。

中田と別れ帰路に着く。その二人を見届けてからだ。

中田は周囲を見回しだ。そのうえでだ。

誰かにだ。こう尋ねたのである。

「もういないのかい？」

「はい、もう消えたようです」

「そうなのか。じゃあ仕方ないな」

話を聞いてすぐに頷く彼だつた。

第三話 見てしまったものの十一

「帰るか」
「そうされますね」
「ああ。 あなたはどうするんだい？」
「私ですか」
「そうだよ。 あなたは」
「同じです」
「ううだとだ。 声は中田に答えたのだった。
「これまでと同じです」
「じゃああれか」
「消えます」
「消えるのか」
「このまま」
「何かいつも素っ気無いな」
「うう声に言つ中田だった。
「あなたはそれでいいんだな」
「はい、私は」
「ううだとだ。 また言つ声だった。
そしてだ。 そのうえでだつた。
声は今度はこんなことを言つてきた。
「それでなのですが」
「それで？」
「先程の彼ですが」
「ああ、あの高校生か」
「おわかりですね」
中田に対して。 静かに問う言葉だった。
「あの彼もまた」
「剣士か」

「そうです。彼は水の剣士です」

「水な。じゃあ俺と逆か」

「はい、中田さんは火ですから」

「そこがだ。まさに正反対だった。」

「そうなりますね」

「水か。じゃああいつとは」

「戦う運命にあります」

「だよな。闘うんだよな、剣士とは」

「そして最後に残るのは」

「一人か」

中田はここで考える田になつた。

「一人だよな」

「はい、一人です」

「そうなるよな。じゃあ

中田は釈然としない顔になつて。そうしてだ。首を捻つてだ。こんなことを言つた。

「やるしかなか

「戦われますね」

「ああ。剣士に勝てば」

「はい、もらえるお金はかなりのものです

「そうだよな。妖怪倒すよりもな」

「遙かに多いです。さらに」

「そしてなのだつた。さらにだつた。

「最後の一人になれば」

「願いは思うがままか

「それで何を望まれますか?」

「金は闘つて得られるしな

「その問題はそれで解決できるといつのだ。しかしだ。その他にはだつた。

「けれど人間と戦うのはな」

「お嫌ですか？」

「どうもな。好きになれないな」

中田は少し皮肉な感じの笑みになつて話した。

「人間が相手だとな」

「そうですか」

「仕方ないな」

また言う彼だった。

「最後の一人にならないと終わらないんだよな」

「終わらなければです」

「戦いはずつと続くんだよな」

「その通りです。ですから」

「仕方ないな。やるか」

「御願いします」

「しかし。それにしても」

中田はここでまた言った。

第二話 見てしまったものの十三

「因果な話だよ。あの高校生嫌いじゃないんだけれどな
「ですがそれが運命ですかから」
「剣士の運命だつていうんだな」
「その通りです。最後の一人になるまで戦い」
「願いを手に入れるか」
「中田さんは家族を救いたいのですね」
「だからそれは手術の金さえあればいいんだよ」
「これが彼の考え方だつた。
「まあ。金になるな」
「それですね」
「俺は金が欲しい」
「それで戦うというのだ。
「そうするからな」
「では。そういうことで」
こうした話をするのだった。そして彼もまた去つた。
だがその彼の後姿を見る女がいた。彼女は。
聰美だった。聰美は彼を見てその緑の目を曇らせていた。そのう
えでだ。

「こうだ。何も、誰もいないそこに問つたのだった。
「お姉様」
「貴女ね」
「はい、この時代でもですか」
「そうよ」
あの声がだ。聰美にも答えるのだった。
「私は。そうして」
「剣士達をこの時代でも弄ぶのですか」
「弄んではないわ」

それはきつぱりと否定するのだった。声も。

「私は。ただ」

「共にいたいだけというのですね」

「ええ」

そうだとだ。声は苦い色で聰美に答えた。

「それだけです」

「しかしそれで」

「彼は私の全て」

声は聰美に対して、じつ返してきた。

「その彼がいないと」

「ですが。彼等は」

「彼等は罪人でした」

拒む言葉はここでもだつた。形こそ変えてもだ。あくまでだ。聰美的言葉を否定してだつた。

「それでどうして同情することなぞ」 8

「そうして何千年もですか」

聰美はその声にだ。すがる様にして問い返す。

「彼等を互いに争わせ。命を奪つていいくのですか」

「そうです。そしてその命の力こそが」

「だからです。私は」

「貴女はどうしてもですか」

「はい、彼の為に」

どうしてもといふ言葉でだつた。声は言つのだつた。

「彼が再び私に笑顔を向けてくれる為に」

「では私は」

聰美はだ。顔を上げてだつた。

夜空にいる筈のその姿を見てだ。そのうえでの言葉は。

「その貴女を必ず」

「止めるというのですね」

「彼が貴女にとつて大事な人なら」

それならばだといふのだ。

「貴女は私にとつて大切な人だから」

「そう想つてくれているのですね」

「ですから」

「そこにある姿を見てだ。聰美はさらに話す。

「私は必ず貴女を止めます」

「そうしますか」

「必ずです」

こうしたやり取りのつえでだった。聰美は今は声の主と別れたの
だった。

そして一人夜の中に消えた。深い憂いと共に。

第三話 完

2011・7・22

第四話 中田の告白

久遠の神話

第四話 中田の告白

確かに誰にも言わなかつた。しかしだ。

上城と樹里は一人になるとだ。いつもこの話をするのだった。

「あのスフィンクスだつたね」

「そうよね。実際にああいうのがいるだけでも驚きだけれど

「しかも。剣がどうとかつて」

「どういうことかしら」

首を捻つてだ。二人は話すのだった。

二人は今学校の校舎の屋上で昼食を食べながら話している。食べているのはパンと牛乳だ。学校の購買部で買ったものだ。

それを食べながらだ。上城は言うのだった。今食べているのはあんパンだ。

「僕が。つていうけれど」

「水つてね」

「水臭いって意味じゃないよね」

「まさか。それはないわよ」

樹里は上城の半ば冗談めいた言葉にだ。こう返した。

「上城君つて水臭くはないから」

「そう。じゃあ何かな」

「うん、だから余計にね」

「わからないわよね」

二人で話していく。

そのわからないという言葉の中でだ。樹里はジャムパン、ジャムはイチゴのものだ。それを牛乳と一緒に口の中に入れながらだ。彼女はだ。こう言つのだった。

「水ねえ」

「火と水？」

「そんな感じの話だつたけれど」

「何かの謎々かな」

こんな風にも考える上城だつた。

「ほら、スフィンクスだし」

「そうよね。だとしたら」

「水？僕が？」

「何かを消すのかしら」

「それか飲むか」

水からだ。二人はこうも考えていく。

「ううん、幾ら考えても

「わからないわよね」

「どうもね」

一人は今は幾ら考えてもだつた。
わからずにはだ。結局今はだつた。

パンを食べそうしてだ。昼食を済ませることにした。その中でだ。
樹里は今食べているクリームパンについてだ。こう言った。

「この学校のパンつて前から思つてたけれど」

「八条パンのパンだよね」

「美味しいわよね」

中のクリームも味わいながら話す。

「優しい味で」

「パンも柔らかいしね」

「そうよね。しかも安いし」

その安さの理由はだ。ここにあった。

「やつぱり。学校の購買だと」

「そりや高いと売れないと」

「ええ。あと作ってるパンも」

「これとかだよね」

上城はすぐにサンドイッチを出してきた。かなり分厚いチキンカ

「サンドだ。

それを樹里に見せながらだ。そうじて話していく。

「サンドイッチだつてね」

「美味しいわよね」

「そうそう。一つ一つにボリュームがあつて」

「味もいいし」

「恵まれてるわね」

パンについてもだ。そうだつた。

「あとだけれど」

「そう、あとよね」

「飲み物も充実してない？」

「してるわね」

それもだつた。いいというのだ。

「牛乳も色々あつて」

「野菜ジュースもあつてね」

「何かパンだけでも飽きないよね」

「この学校にいたら」

そんな話をしながらパンを食べている一人だつた。それが終わつてからだ。

二人で教室に戻ると。そこではだ。新聞が読まっていた。その新聞は。

第四話 中田の告白の一

「んつ、スポーツ新聞？」

「違うみたいよ」

それではないとだ。樹里が上城に話した。

「普通の新聞みたいね」

「そなんだ」

「ええ。ただ」

その読まれている新聞を見る。するとだつた。
そこに写真で出でていたのは。

「中田さんだね」

「そうね。あの人よね」

剣道着に防具の彼がそこにいた。何とだ。

全国大会で優勝したと書かれていた。それを見てだ。
上城がだ。最初に言った。

「凄いね。全国大会で優勝つて」

「そうよね。そこまで強いのね」

「強いとは思つてたけれど」

「彼にとつてもだ。予想以上だつた。

それでだ。上城はこんなことも言つた。

「僕も努力して」

「全国大会優勝？」

「無理かな、それは」

自分で言つてすぐにだ。苦笑いで打ち消したのだった。

「そこまでは」

「まあ。努力次第ね」

それ次第と答える樹里だつた。

「結局諦めたらそれで」

「それで終わりだつていうんだね」

「そう。諦めたらね」

本当にだ。それで終わりだというのだ。これが樹里の言葉だった。
それでだ。上城にハッパをかけるようにしてこうも言った。

「上城君もあれよ。新聞にああしてね」

「載れる様にだね」

「頑張つたらいいのよ」

「こう言うのだった。」

「そうすればいいのよ」

「そうだね。努力してね」

「剣道もよね。稽古すればするだけ」

「どの武道、スポーツでもそうだけれどね」

「じゃあ。そうしたらね」

「いいね」

「そう思うわ」

「こう上城に話す。」

「やつぱり人間努力よ」

「言い換えると努力しないと」

「人間駄目よ」

「そうなるのだった。逆説的にはだ。」

「そうした話もした。上城の学園生活は今は平和だった。
しかしだ。まだつた。」

部活の後の下校時間にだ。上城は。

中田と会つた。その彼を見てだ。挨拶の後で言つたのだった。

「新聞見ました」

「ああ、あれな」

「凄いですよね」

「目を輝かせてだ。彼にこう言つたのである。

「全国大会で優勝なんて」

「まあなあ。調子もよかつたしな」

当人はといふと軽い調子で返してきただけだった。

「特にな」

「凄くないっていうんですか？」

「いや、そう言つたら嫌味だよな」

「嫌味になります？」「

「そうなるだろ。まあだからな」

「言葉を選んでだ。こう言つたのだった。
「凄いよな。俺つて
「はい、凄いです」
「だよな。全国大会優勝は嬉しいよ」
はにかんだ顔での言葉だつた。

第四話 中田の歴史III

「正直やつたつて感じだよ」「どうしたら全国大会優勝なんてできるんでしょ?」
「あれだな。戦つてるからだな」「戦う?」

「だからだろうな」「だからだな」

「どう話すのだった。」

「戦うつていいますと」「色々あつてな」

何かを隠す口調での言葉だった。

「まあ。こつもそつしてるからな」「戦つてるんですか」

「実戦が一番なんだよ。強くなるよ」

「実戦ですか」「ああ、そなんだよ」

「それだというのだ。」

「戦うのが一番いいんだよ」

「それじゃあ」

中田の話を聞いてだ。上城は。
彼の常識からだ。こつもそつしたのだった。

「稽古ですか」「稽古ですか」

「稽古!-?」

「それですよね」「まだ言つ。」

「やつぱり」「いや、まあな

「まあな?」「まあな」

「実戦つていつも色々だからな」「色々つていいますと」

「あれだ。とにかく実際に刀持つてやることだよ」

中田はこの辺りはあえてぽかして話した。そしてそれを聞いた上城はとくに。

まさか彼が実際に戦つているとは考えずにはだ。ただこいつ戦つだけだった。

「そうですか。一本勝負とかかかり稽古とかは」「まあいいな」

中田はまたぽかして話す。

「とにかく人間な」「努力ですよね」

「頑張るんだな、あんたも」

「全国大会は無理でも」

それでもだとだ。彼なりに考えて言つ。

「頑張りますね」「ああ、頑張れ」

今度は屈託のない笑顔で言つ中田だった。そして上城もだ。彼の言葉の背景までは考えずだ。そのうえでだ。稽古に身を打ち込むことにしたのだった。それが彼の考えだつた。上城は中田と笑顔で別れた。彼はそれで終わつた。だが中田はとくに。彼と別れてから。

声を聞いた。あの声をだ。

「来ます」

「そうか、またなんだな」「それでどうされますか?」

「どうするつて選択肢は一つしかないだろ」

「戦われますね」

「ああ。相手は何匹だ?」

「一匹です」

声はこう彼に答えた。

「一匹ですが」

「一匹ね。それでも尋常じやない強さなんだろうな」

「強いと思います」

それは間違いないとだ。声も言ひ。

「何しるミノタウロスですから」

「ああ、あれか」

ミノタウロスと聞いてだ。中田は納得した顔で頷いた。
そのうえでだ。彼は言った。

「牛の頭のでかい奴だよな」

「そうです。かつてミノス王の迷宮にいた」

「あいつか。あいつが出て来るのか」

「気をつけて下さい。ただ大きいだけではありません

「力も強くてあれだな」

中田もミノタウロスについては知っている。ギリシア神話において最もよく知られている魔物の一つだ。だからこそ言えるのである。

第四話 中田の告白その四

ミノタウロスといふとだ。その恐ろしさの理由は。

「人食うしな」

「かつてラビリンスでは人を生贊にしていました」

「だよな。牛が人食うのか」

「半分は人間ですから」

「ああ、それでか」

半分人間と聞いてだ。中田は幾分か納得できた。

「牛だつたら草しか食わないが人間だつたら肉食うしな」

「そうです。しかしそれはそれで」

「人間が人間食うか」

「確かにこの時代の言葉では」

「カニバリズムだつたな」

一種の異常な精神病の一つとみなされることもある。人間が人間の肉を口にするということは古代からあつたのだ。当然ギリシアでもだ。

「そう言つたな」

「そのカニバリズムです」

「厄介な奴だな」

また言う中田だつた。

「俺も油断したらミノタウロスにだよな」

「食べられたいですか？」

「冗談だろ。誰が食われたいんだよ」

中田は笑つてそれはないと答えた。

「そんな奴いるか？」

「そういうことですね」

「食われる位ならな」

それ位ならだと。言いながらだつた。

その両手にそれぞれ刀を出す。紅蓮の刀をだ。

そしてそのうえでだ。前を見る。その彼にだつた。

声がだ。警戒する声で話した。

「来ました」

「前からかよ。後ろからかよ」

「前からです」

「ああ、來たな」

声が言つたその瞬間にだつた。

三メートルはあろうかという半裸の筋骨隆々の大男が出て来た。だがその頭は雄牛のものだ。

そしてその手には巨大な両刃の戦斧がある。身に着けているのは白い腰巻だけで漆黒の身体においてよく目立つてゐる。その巨人こそが。

「あいつか」

「ミノタウロスです」

「そのままの姿だな」

中田は人身牛頭のその巨人を見て言つ。

「神話の」

「強さもです」

声はそれもだといふ。

「そのままですか」

「一歩間違えたらか」

「はい、食べられてしまします」

「スリル満点だな」

話を聞いてだ。中田は。

シニカルな笑みを浮かべてだ。こう言つてだ。

そのミノタウロスを待ちだつた。そのうえで。

魔物がだ。斧を上から振り下ろすのを見た。そこでだ。

身体を右に動かす。それで。

斧の一撃をかわす。斧は派手な音を立てアスファルトを破壊した。

硬い筈のそこはまるで豆腐の様に砕けてしまっていた。

それを横目に見つつだ。中田は。

魔物の懷に飛び込んだ。そうしてだ。

その腹にだ。右の刀を突き刺した。

突き刺したそこからだ。赤い炎が怒る。それで焼こうとするのだ。

その中でだ。彼はこうも言った。

「さて、これでな

「これで？」

「ステーキだな」

笑つてだ。こう声に言つた。

「塩と胡椒が欲しいな」

「あの、それは」

「余裕だつていうんだな」

「そう聞こえますけれど」

「戦いつてのは焦つた方が負けるんだ」
中田の考への下にだ。それで言つのだつた。

第四話 中田の矢印の五

そのうえでだ。ちらにだつた。

左の刀をだ。左から右にだ。横薙ぎに払つた。
それで今度は斬つた。しかしだ。

魔物はまだ倒れない。それどころから。

身体を思いきり引いてだ。突き刺さつた刀をそれで抜き。
燃え上がる二つの傷を何ともせずにだ。再びだ。

斧を振るう。今度は何度も何度もだ。

無造作なまでに振るい中田を叩き斬りうつする。彼はそれを巧み
に動きかわしつつだ。

そのうえでだ。また声に尋ねた。

「なあ、こいつな

「体力ですね」

「しぶと過ぎないか?」

「じう声に尋ねたのである。

「これはあんまりだる」

「ですから。神話のままの強さですから」

「元々すぐえしぶとかったのか

「はい」

その通りだとだ。声は答えた。

「そうです」

「参つたな、こりや」

中田はその斧の攻撃をかわしながらまた言つ。

「一撃でも受けたら終わりだしな」

「そして貴方の攻撃は

「中々聞かないな」

「そうですね」

まあにそつだと言つてだ。それでだ。

再び攻撃を浴びせる。今度は。刀をだ、まずは交差させてだ。それぞれ下から上に一閃させる。それでだ。アスファルトに紅蓮の炎を走らせ。それで。魔物にぶつけ足から焼く。その炎で動きを止め。再び突進してだ。魔物の膝に足をかけ。一気に飛びその途中にだ。左の刀を一閃させた。それで魔物を両断しそのうえで焼く。これで決まりだつた。そうしてからだ。着地した彼が見たものは。今まさに焼かれんとする魔物だつた。魔物は立つたまま両断されてそのうえで。

漆黒の身体を焼かれ消えていっていた。そこまで見てだ。中田は満足した顔になりだ。声に言つた。

「これで決まりだな」

「はい、ミノタウロスは滅びました」

「一時はどうなるかって思つたけれどな」

「炎を走らせそしてですね」

「ああ、一気に真つ一つにして焼いてやつた」

「そうしたと。己の闘いを振り返り話す。

「これならな」

「どの様な体力はある魔物でもですね」

「ああ、倒せる」

「それができるというのだ。」

「そう思つてな」

「考えられましたね」

「焦つてなかつたからな」

「それでだ。考えられたというのだ。」

「できたんだよ」

「決して焦らないですか」

「だから。焦つたら負けなんだよ」

中田は燃え盛る魔物を見ながらまた言ひ。

「何でもな」

「焦らない。だから貴方は強いんですね」

「少なくとも強さの元の一つかな」

「そうですね」

「ああ、それで今度の金は」

「はい、もうすぐ出ます」

見れば魔物は今まで焼夷箭へ死んでいた。その後でだと
いつのだ。

そしてその言葉通りだ。それが出て来た。

黄金の棒が数本だ。魔物が消えてから出て来た。それを手に取り
だ。

中田は満足した顔になりだ。刀を消してから声に話した。

「報酬だな」

「そしてそのお金で」

「ああ、家族がまた助かる」

「いつも言つのだつた。

「いいことだよ」

「それでなのですが

「剣士だよな」

「はい、剣士を倒せばです」

彼と同じ立場のだ。その剣士を倒せばとこつのだ。

第四話 中田の苦悶の六

「怪物を倒すよつたらに」です
「金に力が手に入るんだよな」
「そうです。ですから」
「好きになれないな」
しかしだ。中田はとつと。
難しい顔をしてだ。いつ声に言つたのである。
「どうしてもな」
「人と戦うことはですか」
「甘つちやろい考え方も知れないけれどな」
「いつ言いながらだ。声に返す。
「それでもな」
「人と戦い倒すことはですか」
「したくない」
「じうだ。はつきりと言つ彼だつた。
「化け物相手ならどれだけでもやるがな」
「そうですか。しかし」
「望みを果たす為には」
「最後に一人にならなければいけません」
声の感じは穏やかだ。だが中田にとつてはだ。
峻厳そのものの言葉だつた。実に厳しい。
その厳格な言葉を受けてだ。彼はまた言つた。
「だよな。しかもだる」
「はい、最後の一人になるまでです」
「戦いは続けられるか」
「そうです。魔物も永遠に出て来ます」
「手術代だけでいいんだけれどな」
中田は苦笑いになつてこう言つた。

「けれどどうもな」

「ご両親と妹さんはどうですか？」

「今は延命にしかなつてない」

金を稼いでいるそれがだ。その費用になつてているのだ。

それに加えてなのだ。家族を助けたければ

「やっぱり手術が必要だ。それにな

「それに？」

「手術は絶対に成功するそうだ」

それは間違いないというのだ。

しかしだ。中田は顔を曇らせてまた言つた。

「けれどそれでもな」

「完治はですか」

「無理みたいだな。怪我が予想よりずっと酷くてな

「では最後の一人になります」

そのうえでだというのだ。声は。

「願われれば」

「皆元通りになるんだな」

「そうなります。ですから」

「やるしかないんだな」

中田は溜息をついた。しかしそれでも言つたのだった。言つしかなかつた。

「わかつたさ」

「そうです。その為には

「わかつたさ」

浮かない顔でだ。首を横に振つて頑垂れてだ。

中田は声に答えた。そして言つのだつた。

「他の奴ともな

「戦われますね

「ああ、そうする」

こう答えた彼だった。そう答えるしかなかつた。

「これからもな

「はい、それでは

「じゃあ。今は金はこうして貰つたしな」

手の中のその黄金の棒を見てだ。そのうえでの言葉だ。

「とりあえずはこれでいいよな」

「今は

「これで帰るや」

そうするとだ。中田は声に答えた。

「じゃあな

「はー。それでは

こうした話をしてだつた。声も別れの言葉を言った。
その別れの言葉を受けてだ。中田はその場所を去ろうと踵を返し
た。だがその彼の前にだ。

上城がいた。やつしてだ。

表情を強張らせてだ。彼はそこに立っていた。
何も話さない。しかしだ。それでも田で言つていた。
その田を見てだ。中田も言つ。

第四話 中田の呪いの七

「見たんだな」

「それは」

「何時から見てたんだ？それで」

「途中。財布を落としてることに気付いて」

それで戻つたというのだ。見れば上城のその手にはだ。黒い財布がある。それを落としたことは明らかだった。その財布を見ながらだ。彼は話す。

「それで戻つて来て」

「見たんだな」

「あの牛の怪物が出た時から
その時代からだというのだ。」

「見るつもりはなかつたですけれど」

「いや、あんたもな」

しかしだ。中田はだ。

その上城にだ。こう言つた。

「聞いた筈だよ。水なんだろ」

「そのことですか」

「ああ、あんたは水の剣士なんだよ」

「剣士つて」

ここでだ。あの声がだつた。

上城に対してだ。こう言つてきたのだった。

「剣士は全員で十三人です」

「十三人！？」

「はい、それだけの剣士がいて」

それでだとだ。さらに言うのだった。

「残るのは一人です」

「一人・・・・・」

「つまりあれだよ」

声と入れ替わる形でだ。中田も上城に話す。

「俺達は魔物、さつきのな」

「あの牛の化け物ですよね」

「もう他にも会つてないか?」

中田はそのことも推察して彼に尋ねた。

「何かな。さつきのとは別に」

「実は」

ここでだ。中田に対してものことを話した。

「前にスフィンクスですか?」

「彼女ですね」

声がだ。スフィンクスと聞いて上城に応えてきた。

「あの獅子の身体に女の頭と胸を持ち」

「それで翼が生えていました」

「そう、彼女ですね」

声はだ。知っているといつた感じだった。

その声でだ。あらためて話すのだった。

「彼女と会つてですか」

「その水のことを言われました」

「そうでしょうね。しかしです」

「あれは事実だったんですか」

「事実だからこそです」

ここでだ。声は上城にこつも話した。

「貴女は彼女と会つたのです」

「そういうことですね」

「そうなります。最初は信じられませんでしたね

「何でいいますか」

上城は素直にだ。声に対して答えた。

「あれですね。実際にああした魔物がいるのは

「それ自体がですね」

「想像できないでしょ。あんな非現実的な存在

「現実とは曖昧なものです」

その現実についてはだ。声は「」と書いて上城に返した。

「実際にどうかといふとです」

「ああした存在も成り立つんですか」

「そうです。現実は神々の匙加減でどうとでもなります」

「神々!?」

「そう、神々のです」

どういつた神々のかは言わずにだ。

声はだ。あらためてこうも話してきた。

「それでどうとでもなるものですから」

「何かよくわからぬですけれど」

「つまりです。神々の裁量一つで

「ああした魔物もですか」

「この世に存在します。そうしてです」

声は話の本題に入った。それこそがだった。

第四話 中田の命運のハ

「剣士もまたです」
「いるんですか。十三人も」
「貴方も含めて」
「それでだ」
また中田が上城に話してきた。
「願いを適えなければな。お互に戦つてだ」
「願いをですか？」
「願いは。まあ何でもいいみたいだな」
そのこと自体についてはだ。無頓着な感じだった。
「けれど。願いを適えたいとな」
「あの、願いが特になかつたら」
その場合はどうなのか。上城はいぶかしむ顔になりその場合について尋ねた。
「別に戦わないでいいですよね」
「そうはいきません」
しかしだつた。このことはだ。
「どうかとだ。声はすぐに言つてきた。
「剣士になるのは運命ですから」
「運命つて」
「はい、運命だからです」
それでだ。どうかというのだ。
「必ず戦わなければならぬのです」
「そんな、無茶苦茶じやないです」
「まあそうだよな」
「中田もだ。その何が何でも戦わないといけないことにつけば同意だつた。

だがそれと共にだつた。彼はいつも言つた。

「けれど願いがない人間なんているか？」「そのことですか？」

「ああ。そんな奴いるか？」

「問うのはこのことだった。」

「何もない奴なんてな」

「それは」

「そうだろ。誰だつて大なり小なりな

「願いはあるからですね」

「それを適える為に戦つてだよ」

「最後の一人になって」

「ああ、願いを適えるんだよ」

「そのことをだ。上城に話した。

「どうだよ。願いがなくてもな

「戦わないといけなくて」

「最後の一人になればな

「戦つた結果だ。そうなればといつのだ。

「願いが適うんだよ」

「僕の願いが

「で、どうするんだ？」

中田はあらためて上城に尋ねた。

「あなたはな

「僕は」

「一つ言つとくけれど戦うことからは逃げられないぜ

「それはだ。絶対だというのだ。」

「その選択肢は絶対なんだよ」

「じゃあ後は

「願うかどうかだよ」

「それだというのだ。」

「どうするんだ、それで

「それは」

「水の剣士よ」

声もだ。また彼に言つ。

「剣ですが」

「あつ、それですか」

「それは出ると思えばです」

「出で来るんですか」

「貴方の手の中に」

そこにはだ。出で来るところのだ。

「そうなります」

「どんな形の剣でもな。あんたがイメージすればな」

「どうかとだ。ここでも話す中田だつた。

「手の中に出で来るんだよ」

「それでその剣で」

「戦うんだよ。俺だつてな」

「中田さんもですか」

「ほり、いつしてな」

実際にだ。彼はここで刀が出ると念じた。するとじだ。

その両手にだ。一本の刀が出たのだった。

その赤い燃え盛る炎を思わせる刀をだ。上城に見せながらだつた。

そのうえでだ。また上城に言つのである。

第四話 中田の刀の九

「念じれば出て来るんだよ」
「日本刀ですか」
「だから。どんな剣かはな」
それはだというのだ。このことはまた話す彼だった。
「劍士それぞれがイメージする奴だからな」
「人それぞれですか」
「その劍士のな。じゃああんたはどんな劍なんだ?」
どういったものをイメージするか。それを聞いた中田だった。
「ちょっと念じてくれよ」
「それじゃあ」
その言葉を受けてだった。上城は。
実際にだ。自分の両手の平を見ながらだ。
念じるとだ。出て来たのは。
青い刀身だった。日本刀だ。ただしだ。
その長さはかなりのものだ。一メートル半に達する。そしてその
刃は青く冷たく輝いている。その刀を見て中田はこいつ上城に言った。
「それだよ」
「この刀がですね」
「ああ、あなたの剣だよ」
それこそがだというのだ。
「そうなるからな」
「じゃあこの刀で」
「そうです」
また声が言ってきた。中田に代わって。
「魔物と。そして外の劍士達と」
「戦つてそうして」
「貴方の願いを適えるのです」

「それが僕の運命なんですね」

「既に決まっていることです」

「そのことからはだ。どうしても逃れないと告げる声だった。

「そういうことですから」

「わかりました」

上城は納得できなかつた。しかしだ。

それでもだ。憮然としながらも声に対しても頷いてみせたのだった。
そのうえでだ。中田を見てだ。彼に問うつた。

「なら今からですか」

「ああ、俺とか」

「戦わないといけないんですか？」

彼を見てだ。問つたのである。

「そりなんでしょうか」

「ああ、今はな

「今は？」

「俺はこれで帰るからな」

そうするとだ。彼は軽い笑顔で上城に告げた。

「今日はなしにしておこうな

「戦わないっていうんですか

「そうするわ。じゃあな」

挨拶をして右手を軽くあげてだ。それから上城に背を向けた。
そのまま去る。上城はその背を見送るだけだつた。その彼にだ。
声がだ。ここでも言つてきたのだつた。

「では今日はです」

「これで終わりですか

「はい、そうなります

まさにそうだといふのだ。

「とりあえず貴方は剣を手にされました

「それでこの剣で」

「貴方の願いを適えて下さい」

「僕の願いつて」

そう言われてもだつた。

上城は考える顔になつてだ。それでだつた。

洮だ。声に対して答えた。

「まだそれは」

「ありませんか」

「はい、ないです」

「そうだというのだ。」

「いきなりですし。それに」

「それには」

「僕今の状況で満足しますし」

だからだ。それでだというのだ。

「特に何も」

「そうですか。それではです」

「それではつて？」

「願いは見つけて下さい」

そればだ。そうしてくれといふ声だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2979v/>

久遠の神話

2011年10月9日03時12分発行